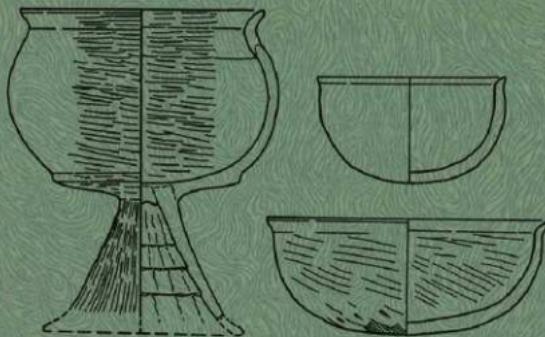


有 尾 遺 跡



1992・2

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告 第30集

有 尾 遺 跡

1992・2

飯山市教育委員会



発掘調査風景

出土近世陶磁器



例　　言

- 1 本書は、長野県飯山市大字飯山字有尾3567番地ほかに所在する有尾遺跡の緊急調査報告書である。
- 2 有尾遺跡は縄文時代前期有尾式土器の標式遺跡として著名だが、今回の調査では有尾式期の遺跡は検出していない。今報告は古墳時代・弥生時代・中世の遺跡調査報告書である。
- 3 調査は飯山市農業協同組合（現いいやまみゆき農協）の本所建設に伴うもので、飯山市農業協同組合より依頼を受けた飯山市教育委員会が昭和62年（1987）7・8月に実施した。
- 4 発掘調査は、飯山市教育委員会が下記に掲げる調査会を設立し、調査団を組織して実施した。

有尾遺跡調査会（昭和62年度）

会長 浦野 昌夫（飯山市教育長）
副会長 佐藤 清（飯山市教育次長）
委員 上原 幸夫（飯山市文化財専門委員長）
高橋 桂（飯山市文化財専門委員）
前沢 誠（飯山市有尾区長）
事務局 小川 恵一（飯山市教育委員会社会教育係長）
望月 静雄（同係員）

調査団

団長 高橋 桂（飯山南高校教諭）
調査員 望月 静雄
常盤井智行
田村 涉城

作業参加者（順不動）

稻葉くに子・小田切力・内山和江（北町） 佐藤良子（神明町） 上野磨・上野いつ・
北山けさえ・田中たか・斎藤よしい・内田ミツイ（市ノ口） 中条秀樹（有尾）
中村智子・石黒京子（県町） 小出よね子（金山） 岸田義元（山口） 武田ゆみ子・
武田京子（笹川） 矢満田康子・田中孝一・高橋信博（大学・専門学校生） 岡村武
彦・西尾剛・坪根まだか・島田ルミ子・中条雅之・内田真志・門脇一也・丸山学・
西堀秀一・藤沢英明・山田利明・桜井岳彦（高校生）

整理参加者（調査員除く・順不同）

稻葉くに子・小出よね子・内山和江・北山けさえ 小林みさを（柏尾） 山崎満枝
(大深) 小林龍子（小佐原） 中島英子（中野市） 桃井伊都子（上倉）

- 5 出土した近世陶磁器類については、五島美術館竹内順一氏・丸子町公民館竹内一徳氏にご教示を得た。
記して感謝申し上げる。
- 6 本書の編集は常盤井が主体となり望月が助言し、高橋団長が統括した。執筆分担は目次に示した。

7 本書発刊時の教育委員会事務局は以下のとおりである。

教育長 岩崎 強

教育次長 佐藤 清

社会教育係長 渡辺 博

凡　　例

- 1 挿図中の方位はすべて磁北である。
- 2 遺物実測のスクリーントーンは、赤彩部分・黒色処理部分・施釉部分を示し、須恵器の断面は黒く塗り潰した。
- 3 調査地全体図・遺構図の等高線は20cm間隔である。また、明らかな擾乱坑は下端線を入れていない。

目 次

卷頭図版

例言・凡例

第1章 遺跡の概要

1 地理的位置と自然環境	望月 静雄	1
2 歴史的環境	常盤井智行	1
3 過去の調査と学史的位置	望月 静雄	5

第2章 調査経過

1 調査に至る経過	望月 静雄	8
2 調査	"	9

第3章 遺構

1 土坑・ピット・土器だまり	常盤井智行	11
2 溝	"	16
3 竪穴住居	"	17
4 掘立柱建物	"	14
5 井戸	"	20

第4章 遺物

1 旧石器	中島 英子	25
2 繩文時代	常盤井智行	30
A 土器		
B 石器		
3 古墳時代	常盤井智行	30
A 土師器		
B 須恵器		
4 平安時代	常盤井智行	32
A 土師器		
B 須恵器・施釉陶器		
C 土製品		
D 石製品		
E 鉄製品・鉄滓		
5 中世・近世	常盤井智行	33
A 陶磁器		
B 石製品		
C 木製品・漆製品		
6 その他の時代	常盤井智行	35

第5章 まとめ

1 有尾遺跡の変遷	常盤井智行	46
2 大形掘立柱建物群の性格	常盤井智行	49

第6章 総括

高橋 桂	51
------	----

挿 図 目 次

図 1 有尾遺跡の位置	2	図18 石器実測図 3	29
2 調査地周辺の遺跡	4	19 繩文土器拓影	29
3 調査地周辺の地形	6	20 土器・陶器実測図 1	36
4 調査地設定図	8	21 土器・陶器実測図 2	37
5 焼土坑SK 2	11	22 土器・陶器実測図 3	38
6 調査地全体図	12・13	23 土器・陶器実測図 4	39
7 繩文時代の土坑	14	24 土器・陶器実測図 5	40
8 近世の井戸・土坑	15	25 土器・陶器実測図 6	41
9 焼土坑SK 8	16	26 土製品・鉄滓・石製品・鉄器	42
10 土器埋納ビットKP 1	16	27 陶磁器実測図 1	43
11 遺構図 1	21	28 陶磁器実測図 2	44
12 遺構図 2	22	29 木製品実測図	44
13 遺構図 3	23	30 磨製石器	44
14 遺構図 4	24	31 石製品実測図	45
15 旧石器分布図	26	32 主要遺構図	46
16 石器実測図 1	27	33 有尾遺跡変遷図	48
17 石器実測図 2	28	34 周辺遺跡の掘立柱建物	50

表 目 次

表1 石器計測表	25
----------	----

PLATE目次

P L 1 遺跡航空写真	P L 7 掘立柱建物SB 2
P L 2 調査前の風景（南から）	鋳冶関係土坑SK 2
調査前の風景（西から）	大形掘立柱建物SB 3と竪穴住居SB 4
調査開始式	P L 8 大形掘立柱建物群 SB 6を中心
P L 3 調査地全景 遺構上面輪郭	大形掘立柱建物群 SB 15、18を中心
調査地全景 完掘状態	大形掘立柱建物群 柱穴切り合い関係
P L 4 調査地東北部	P L 9 掘立柱建物SB 7
調査地南西	P L 10 井戸SE 3 石臼出土状態
P L 5 繩文ビットJP 1	井戸SE 4
繩文ビットJP 2	井戸SE 4 板出土状態
落とし穴SK 13	P L 11 井戸SE 2
P L 6 竪穴住居SB 4	近世土坑SK 1
土器だまりSX 1と近世井戸SE 2	近世土坑SK 3
土器埋納ビットKP 1	

- P L12 旧石器
 旧石器
 繩文土器
- P L13 土師器 高环・坏
 土師器 高环脚部
 土師器 高环・壺
- P L14 土師器 坏・甕・瓶
 古式須恵器
- P L15 平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器
 須恵器甕体部片
 須恵器甕体部片・珠洲系陶器
- P L16 近世陶磁器
 近世陶磁器
- P L17 ふいご羽口・鉄滓
 磨製石鎌・鉄製品・土鍤・かまと
 石製品
- P L18 五輪塔
 漆器椀
- P L19 木製品 箱・板・自然木
 木製品 板状品
 木製品 棒状品

第1章 遺跡の概要

1 地理的位置と自然環境

有尾遺跡は、長野県飯山市大字飯山字有尾地籍に所在する（図1）。甲信国境に源を発する千曲川は、佐久・上田盆地を流下し長野市川中島付近で犀川を合わせ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると東側の長丘丘陵、西側の班尾山麓の降起地帯を穿入蛇行する。そして、中野市古牧地区の長丘丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃に最後の平を形成する。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行して越後へと流れ去り、信濃川と名を改めて日本海へ注ぐ。

飯山盆地西縁は、黒岩山（938.6 m）、筑前山（1288.8m）等比較的低い関田山脈によって画されている。一方、東縁は毛無山（1640m）等三国山脈の支脈によって、また断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。

平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。東側は、千曲川によって形成された自然堤防や氾濫源堆積物上の低地に飯山市木島地区が存在する。西側は、飯山市街地北方より戸狩にいたる長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて東側に常盤平、西側に外様平が広がり飯山市最大の穀倉地帯となっている。この長峰丘陵は、416.2 mを最高とする丘陵で丘陵上には弥生遺跡が数多く存在することで古くより知られている。有尾遺跡はこの丘陵南端に位置し、丘陵に付随して形成された河岸段丘面に立地する。

有尾遺跡は、縄文前期有尾式土器の標式遺跡である。縄文時代の範囲は飯笠山八幡神社境内を中心とした小範囲と思われるが、古墳・平安・中世の遺跡はほぼ有尾地区的全域に広がっている。南側は千曲川に注ぐ一般河川の皿川が崖下を流れ、東側は段丘崖となって河川氾濫源および千曲川に面する。西は長峰丘陵の比較的急峻な東斜面に接続している。

今回の調査地区は、飯笠山八幡神社の東側、千曲川と皿川によって制約されながら舌状に張り出す部分である。八幡神社との間にはJR飯山線が段丘を掘削して、切り通しとなっている。この掘削時には多量の遺物が出土したという。

遺跡の南約200mには、県立飯山北高等学校があり、西南約300mにはJR飯山線の北飯山駅がある。また、東の千曲川との間には、国道117号線が走っている。

2 歴史的環境

有尾遺跡のある旧飯山町内は、現在北信濃の中心都市として発展しているが、それは上杉輝虎（謙信）の飯山城大改革以降のことである。むしろ古代・中世の遺跡の分布をみれば、市内の遺跡密集地は外様平および長峰丘陵を中心とした地域と静岡から連にかけての地域であり、現在の飯山市街地は両者の中间にあたり遺跡分布の希薄な地域となっている。

有尾遺跡は外様平と長峰丘陵を中心とした遺跡密集地の南端に位置し大河千曲川に接している。有尾は、古代においては外様平の入口的位置を占め、飯山城改革以降は城下の北辺的位置に変わって今日に至っている。

旧石器時代 飯山における人類の歴史は、約2万年前の旧石器時代にさかのぼる。ここ数年の発掘で岡山上段地区を始め多くの遺跡が確認され、飯山は旧石器時代遺跡の宝庫となつた。有尾遺跡でも旧石器時代の石器が出土しており、上野・日焼遺跡とともに千曲川沿辺の遺跡として注目される。

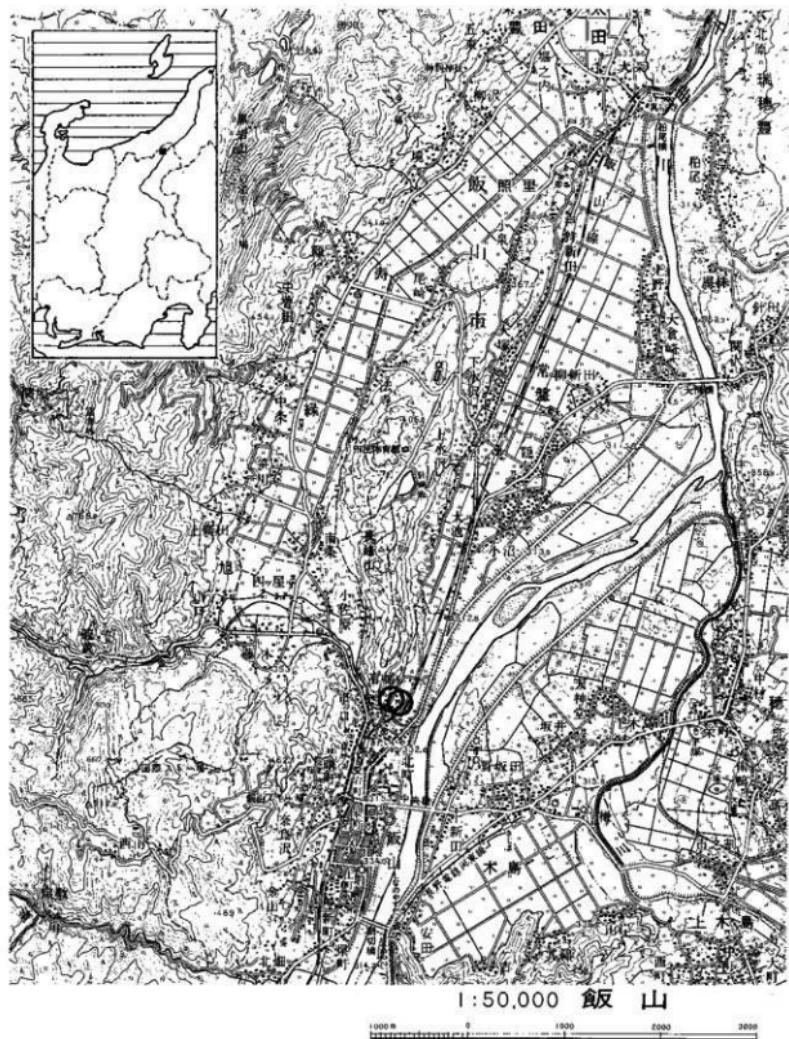


図1 有尾遺跡の位置

縄文時代 縄文時代は約1万2千年前から約2千3百年前まで続く、食料採集文化の時代であり、土器や弓矢が発明された。飯山市内では今年岡山上段のカササギノ池遺跡で草創期の爪形文土器が出土している。小佐原遺跡は昭和44年に永峯光一氏によって発掘され、多量の表裏縄文土器が出土している。

縄文時代早期の遺跡として針尾池や、市街地西方山中の十三ヶ丘・直坂などがあり、押型文土器が発見されている。いずれも高所にあり遺跡も小規模なものと考えられている。

縄文時代前期は集落が発達する。有尾遺跡は前期有尾式土器の標式遺跡として著名である（次項で詳説）。他にも小佐原・長者塚・須多峰・北飯山などの遺跡があり、当期の遺跡は多い。

縄文時代中期は八ヶ岳山麓などで大規模な集落が発達し、中部高地に縄文文化の花が開くが、当地の遺跡は多くない。代表的なのは須多峰遺跡で、新潟方面と類縁性の強い中期前葉の土器が出土している。有尾遺跡でも北陸に類縁性のある中期前葉の土器が出土している。富倉峠あるいは千曲川を介した交流がうかがえよう。

縄文時代後・晚期の遺跡は意外に少なく、市内では後期の石棺墓群が検出された瑞穂宮中遺跡や、魚を線刻した晚期の土器が出土した秋津山ノ神遺跡などがある。

弥生時代 弥生時代は大陸から稻作が伝わり、食料を生産するようになった時代である。飯山地方は北九州に遅れること約3世紀、弥生時代中期後半から遺跡が出現する。外様平南端の柳原地区は飯山でも最も早く稻作を始めた所で、北原・鐵治田・小佐原・須多峰などで弥生時代中・後期の遺跡が発見されている。広井川や皿川が形成した潤滑な低地で水稻を行ったのであろう。有尾でも弥生土器が出土しており、また飯山北高校敷地内の北町遺跡でも弥生土器が発見されている。注意されるのは山地の十三ヶ丘で弥生がみつかっていることで、弥生文化が水稻のみではなかったことを示唆している。須多峰遺跡では権力者の出現を示す鉄鋤・ヒスイ勾玉などを副葬した方形周溝墓が検出されている。

古墳時代 原則として一人の首長を葬るために大きな埴丘をもった「古墳」が造られた時代で、日本列島が小国分立から統一国家へと胎動していった時代である。長峰丘陵は古墳の密集地である。中でも有尾古墳群は長約37mの帆立貝式前方後円墳を含み飯山を代表する古墳群である。市街地南端の法伝寺古墳群も小規模ながら前方後円墳1基を含んでいる。大池古墳群は円墳2基からなる古墳群で長峰丘陵東側の常盤平にも首長が誕生したことを物語っている。これらはいずれも前期～中期の古墳と考えられており、今のところ確実に後期に降る古墳は飯山市内千曲川西岸では発見されていない。古墳時代の集落跡は、前期の遺跡が須多峰・柳町・上野等で検出されているがその土器は北陸の様相が濃い。中期の遺跡は有尾遺跡があり古式須恵器が出土している。後期の遺跡として黄金石・田草川況遺跡がある。

平安時代 奈良時代の遺跡は今のところ市内では発見されていない。この時代は畿内政権が東北進出をくり返しているが、それに信濃の民衆がたびたびかり出されていることが記録に見える。奈良時代を中心とする時代の遺跡が当地に本当にとすればなぜないのかは大きな問題である。

平安時代になると遺跡は急に数多く出現する。特に外様平はその中心地であったらしく北原・鐵治田・小佐原遺跡など、製鉄址をもった集落が営まれている。また有尾を始めとして、長者塚・林子畠・黄金石などの長峰東麓台地にも近接して当期の遺跡が営まれている。これらの飯山地方における当期の大規模な開発の背景として、当地に営まれた「常岩の牧」と呼ばれる官営牧場の設置もその一因となろうことが指摘されている。

中・近世 中・近世の遺跡も近年、城館址を中心に調査例が増加しつつある。市内でも金湯・長者清水・大倉崎館跡などが調査され、輸入磁器等中央に遜色のない遺物が検出されている。特に能登半島の珠洲焼は市内各地で出土しており当時の地方窯製品の流通を考える上で重要な資料となっている。

有尾の名称は「市河文書」応安3年（1370）の、足利基氏の執事上杉朝房が藤井下野入道なる人物に南



図2 調査地周辺の遺跡 1 : 25,000

- 1 有尾（先・繩・弥・古・平・中・近） 2 有尾古墳群 3 針尾池（先・繩・弥・平）
- 4 正行寺北（繩・平） 5 北原（繩・弥・平） 6 東源寺（先・平） 7 錫冶田（繩・弥・平・中） 8 鬼ヶ峰（弥・平） 9 小佐原（繩・弥・平） 10 須多峰（繩・弥・古） 11 ガニ沢上（繩・弥） 12 お茶屋（繩・弥・土師）・大池古墳群 13 長峰（先） 14 長者窓（繩・弥・平）
- 15 林子畠（古・平） 16 黄金石上（平） 17 北町（弥） 18 北飯山（繩）
- 19 神明町古墳群・雨池絆塚 20 雨池北（弥・古） 21 飯山シャンツェ下（繩）
- 22 直坂（繩） 23 十三ヶ丘（繩・弥・平） 24 北畠北（繩・古） 25 法伝寺（平）・法伝寺古墳
- 26 山口城（～安土桃山） 27 飯山城

条五ヶ村を知行せしめた書状に「信濃国水内郡常岩南条・後閑・水沢・有尾・中曾根等事、為本知行不可有相違候、仍執連如件」とみえる。14世紀後半南北朝の中頃には有尾は常岩南条に含まれていたことがわかる。しかしその以前から有尾集落は存在したことはまちがいなく、その実態については今後の考古学的調査にまつことが大きい。

戦国時代には越後の上杉と甲斐の武田が信濃で覇を争うが、飯山は上杉方の前線基地として要衝となる。飯山城は外様平から上倉へかけての地域を本拠とする泉氏一族の居城であったとされているが、上杉輝虎が武田晴信との戦いに際して本格的な城として永禄7年（1564）改築した。有尾の飯笠山神社は、もと飯笠山と呼ばれた現在の飯山城址にあったが、先の上杉による城改築の際に現在の有尾の地に遷され、以降飯山城の鎮守として歴代城主に崇敬された。また飯山より北方への街道は有尾より長峰上あるいは長峰東麓を通って戸狩へぬけているのであり、長峰上の道は今でも「殿様街道」と呼ばれている。

飯山の城下は江戸期以降代々の領主によって整備されて来たが、正徳元年（1711）5月の飯山町大火後の「飯山町諸色差出帳」によれば「上町82戸・本町50戸・肴町21戸・愛宕町52戸・伊勢町59戸・有尾53戸・市ノ口38戸・小佐原19戸・大池11戸・奈良沢68戸・上倉15戸」と記されており、有尾は飯山町内の5町6ヶ村に含まれ、53戸を有する集落であったことがわかる。

参考引用文献

- 『飯山町誌』 飯山市公民館 1955
- 『飯山の遺跡』 飯山市教育委員会 1986
- 『飯山の歴史と自然』 飯山市 1974
- 『北原遺跡』 飯山市教育委員会 1985
- 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告』 I・II・飯山市教育委員会 1989・1990

3 過去の調査と学史的位置

有尾遺跡は、縄文前期の有尾式土器の標式遺跡である。このほかにも弥生・古墳・平安・中世の各時期に亘る遺物が多量に採集されているが、発掘調査による明確な遺構等が検出されていないために、著名な割にその性格は不明となっている。本稿では、昭和20年代に行われた発掘調査と型式認定についての研究史概略を述べることとする。

有尾遺跡が最初に識者の注目を浴びるようになったのは、昭和24年飯山北高等学校郷土研究会による発掘調査によってからであろう（田中 1949）。ただし、大正末期に飯山鉄道敷設工事とともに多量の土器が出土したと伝えられているので、この頃より既に遺跡として知られていたものと思われる。

昭和27年、神田五六氏を中心として飯山公民館による町誌編纂事業の一環として再び発掘が行われた。このときの調査地点は、飯笠山八幡神社境内東側の畠で、昭和24年調査地点を含む32m²の小範囲であった。この調査で、中世の井戸などの遺構等によって破壊されていたが、径7.5mの円形住居と推定される遺構が発見された。報告では、黒浜式主体の住居址であるとされた（神田 1953）。神田五六氏が提示した資料は、櫛齒状工具による列点刺突文の菱形文土器があり、いわゆる黒浜式土器とは異なる内容を含んでいた。

樋口昇一氏は、昭和32年大町市上原遺跡出土資料を分析するなかで、列点刺突文土器に注目して有尾式土器を提唱した（樋口 1959）。その内容は、繊維土器と無繊維土器があり、繊維土器は関東の黒浜式土器とほぼ同様である。無繊維土器は列点刺突文や爪形文・平行沈線文等による連続した菱形文様を形成し、胴部下半部は羽状縞文が充填されているというものである。

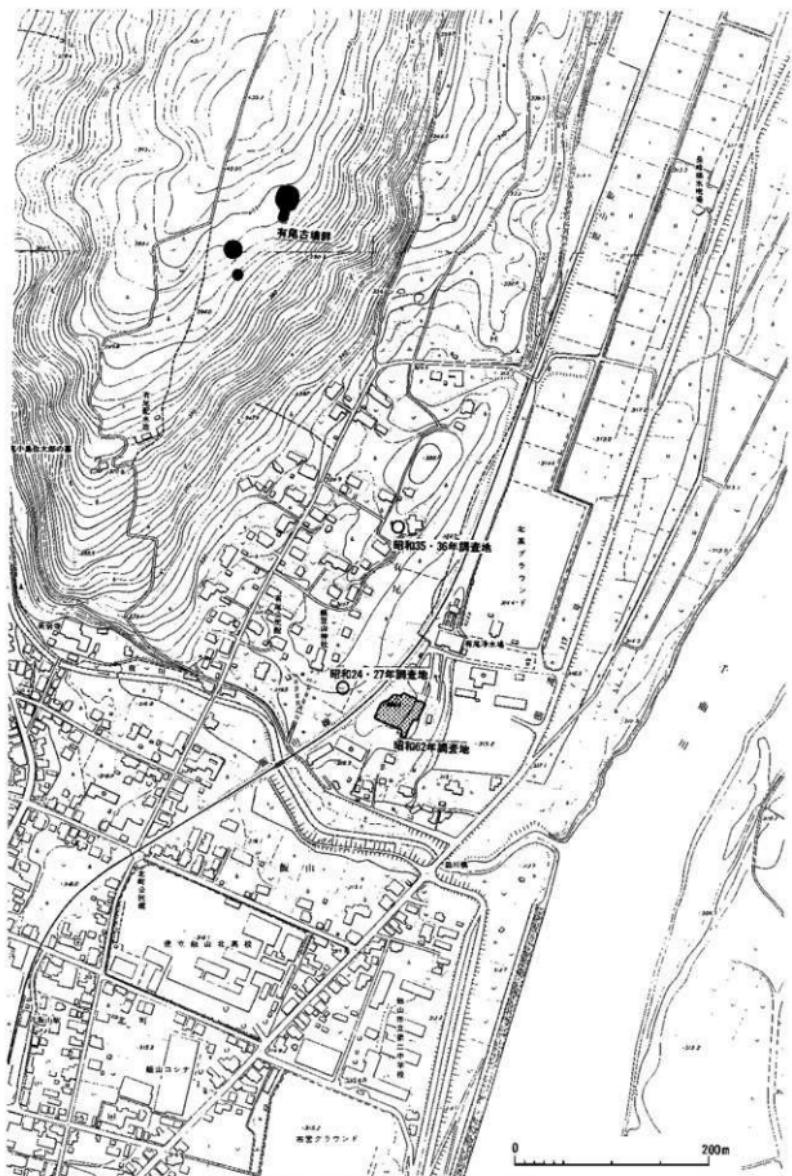


図3 調査地周辺の地形 1 : 5000

永峯光一氏は有尾式土器の分布・内容について再整理し、関東的な織維土器と無織維土器の連続菱形文構成の画一化、西日本の影響と考えられる胸部文様帶との明瞭な区分、千曲川流域に分布の中心があるとされた（永峯 1964）。また、金井正三氏は有尾式土器の標式となった出土土器のほぼ全部の資料を分析し、研究史とともに検討を加えた（金井 1982）。氏は有尾式土器について、文様構成は櫛状工具による列点刺突文土器と菱形文構成羽状繩文土器が併し、繩文のみの土器を除いて多くが無織維土器であるものとした。さらに、列点刺突文土器と爪形文による菱形文土器の分布を検討するなかで、爪形文による菱形文構成の土器を有尾式土器の最低必要条件から除外し、伊那谷を除くほぼ長野県全域と岐阜県・群馬県の一部に及ぶ列点刺突文土器の分布の範囲とされた。これは、爪形文による連続菱形文の分布を含めると黒浜式土器の分布圏全域が含まれてしまい、型式のひとり歩きが有尾式土器の拡大解釈につながることを考慮したものと考えられる。また年代的には黒浜式の一段階に併行し、神ノ木式と南大原式の間に介在するとした。金井氏の論攻以降、関東を中心として再び有尾式土器についての検討が行われるようになっている。ここでは詳細に触れることができないが、例えば金子直行氏が爪形文による大形菱形文に焦点をあて、金井氏とは逆の分布図を導き出している（金子 1989）。

以上、有尾遺跡出土の有尾式土器の研究史について触れてきた。有尾遺跡は、このほかにも古墳時代の遺物分布が濃密であることが知られている。昭和35・36年、飯山南高等学校考古学クラブ（桐原健氏指導）により発掘調査が実施され古墳時代後期の住居址を検出している（飯山南高考古学クラブ 1961）。さらに昭和46年、工場建設が調査を経ずに実施されたことがあり、該期住居址と土器片が出土した。飯山北高等学校地盤部が採集的調査を実施したが、無残にも破壊された後であり、詳細な調査は実施できなかった。また、有尾地区内においても家屋建設などに伴って部分的に発見されることがあるという。

このように、昭和20年代からよく知られている遺跡であり、さらに繩文前期有尾式土器の標式遺跡でありながら、それ以外の遺跡の内容についてはほとんど判明していないのが実情である。面的な保護とともに、遺跡の内容についてもさらに究明していかなければならない。

引用・参考文献

- 神田五六 1953 「長野県下水内郡飯山町有尾遺跡調査概報」『信濃』3次5-8
永峯光一 1965 『日本の考古学』
金井正三 1982 「繩文前期有尾式土器の再検討」『信濃』34-4
金子直行 1989 「繩文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』第25号
飯山南高校考古学クラブ「長野県飯山市有尾遺跡調査概報」『信濃』13-12 1961

第2章 調査経過

1 調査に至る経過

昭和61年9月30日、飯山市農業協同組合阿部組合長理事・久保田総務部長が来庁し本所建設に伴う遺跡の照会があった。当該地は有尾式土器の模式遺跡となっている有尾遺跡の範囲内であった。このため市教育委員会は、県文化課に指導主事の派遣を申請し、11月17日に現地協議を実施した。協議には、県文化課・市農協・高橋市文化財専門委員および市教委の4者が出席した。市農協の説明では、大字飯山字有尾3567番を中心とした地籍に約2,000m²の建物を建設したいとのことで、位置もかねてから組合員の総意で決まった関係上位置の変更は難しいとのことであった。また、建設時期も翌昭和62年4月の総会で承認されれば早速着手したいとの意向を示された。高橋文化財専門委員・県文化課小林指導主事とも遺跡範囲内であり、位置変更が不可能な場合事前の発掘調査が必要であるとの見解を示し、農協側も了承した。

12月15日付けで県教育委員会教育長より、『飯山市農業協同組合本所建設に伴う有尾遺跡（飯山市）の保護について』の回答があった。事前に発掘調査を実施して、記録保存を計るというもので、市農協が費用を負担することとし、予算書が示された。

昭和62年5月27日、埋蔵文化財発掘通知を提出する。

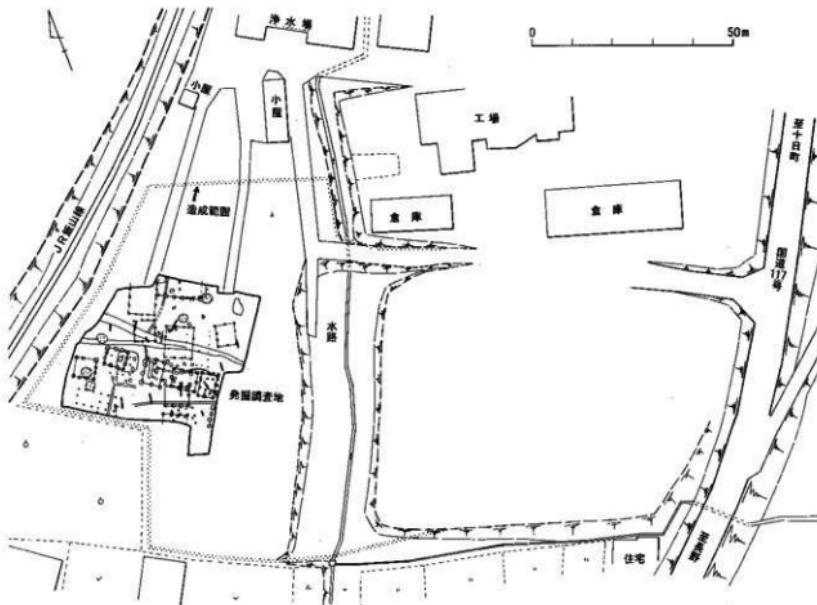


図4 調査地設定図 1 : 1200

5月29日、飯山市農業協同組合長理事阿部雄治氏より『有尾地区埋蔵文化財発掘調査依頼書』が提出され、同29日付けで発掘調査委託契約書を締結した。

6月15日付けで文化財保護法第5・7条による埋蔵文化財発掘届けを文化庁長官あて提出する。

7月3日、有尾遺跡調査会を開催する。

7月4日、発掘調査を開始する。

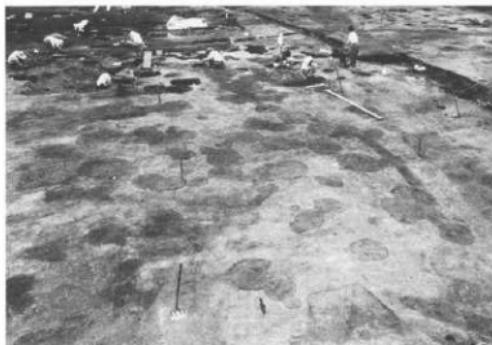
2 調査

発掘調査は、昭和62年7月4日から8月26日まで、建物の建設部分約1,000m²を調査する目的で行った。また、現地での測量作業は8月28日から9月7日まで行った。調査方法は、一辺5mのグリッド法とし、基本坑を調査予定区内に任意に設定した。

事前の調査では、黒色土が薄いためにすべて手作業で実施することとしたが、重機等の機械置場となっていたためかスコップでも容易に除去できない程の硬さであった。そのため約20cmの黒色土をバックホーで除去することとし、7月8・9の両日行った。黒色土はすべて攢乱されており、下層の黄褐色土層も漸移層まで破壊されていた。そのため、時代に關係なく黄褐色土上面で遺構を検出した。検出された遺構は、縄文時代から中・近世に及ぶ各時代にわたっており、包含層が破壊されていた関係上出土遺物も少なく、切り合いで時代判定せざるをえない遺構もあった。また、井戸址が5基検出され、この調査に時間がかかった。

7月19日には一般募集による16名が発掘体験学習を実施した。また、8月23日には現地見学会を催し、多数の見学者があった。

整理作業と報告書の作成については、当該年度において釜淵遺跡の調査報告が控えていたために、昭和63年2月から実施した。3月中にはおおよその整理が完了したが、新規の緊急調査が続くことになり、原稿の執筆が遅延することとなった。



調査地東南部 ジョレンかけの後



井戸の掘り下げ S E 4

報告書の作成・執筆・編集は、調査員常盤井が中心となり、図版の一部は桃井伊都子の手を煩わした。また、遺物写真撮影については田村が行った。



柱穴の掘り下げ



現地見学会 出土品の説明



現地見学会 遺構見学

第3章 遺構

1 土坑・ピット

土坑・ピットは調査地内で数十基検出されているが、ここでは主要なもののみを説明する。

SK 1 (図8) E 7区にある。プランは約1mの円形。断面逆台形で深さ0.9m。底面は平らで下端は稜をなす。埋土中に拳大から人頭大の礫が多く入っていた。SB 22を切る。近世以降と考える。

SK 2 (図5) A 6・7区にあり調査地外へ続く。プランはもともと方形に近いものと思われる。東西3m、南北2mを検出している。底面は凹凸がある。埋土は黒灰色土で中層に焼土を多く含む。遺物は土器を中心とした鉄滓・フイゴ羽口などが坑内まんべんなく出土している。平安時代の鍛冶遺構であろう。

SK 3 (図8) A・B 2・3区にある。プランは2×1.5mの長方形の穴が直交して重なりあったような形をしている。土層観察をしていないが、2~3回掘り替えられたからと考えられる。江戸後期から近代までの陶磁器類が多く出土している。ゴミ棄て穴だろう。

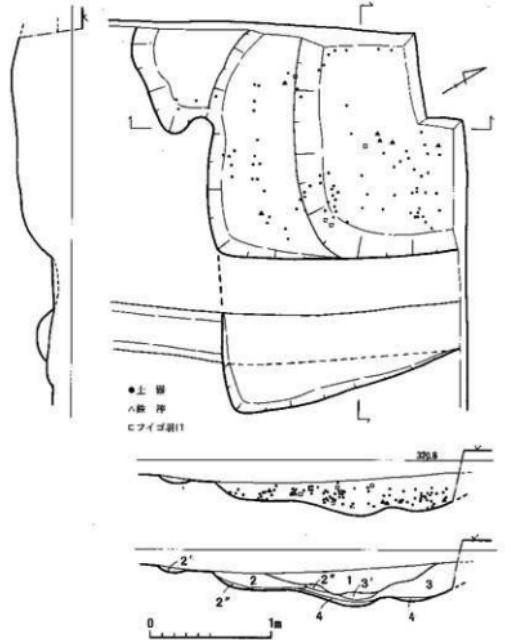
SK 4 (図8) B 5・6区にある。長辺2.2m×短辺1.8mの隅丸方形プランの土坑で、底はほぼ平らである。近世陶磁器類が少量出土している。

SK 5 (図8) C 6区にある。一辺2.2mの隅丸方形プランだが、底は2段になっている。近世陶磁器類が少量出土。

SK 7 (図8) B 6・7区にある。長辺3.2m×短辺2.3mの隅丸方形プランの土坑で、底はほぼ平らである。出土遺物はないがSK 3~5との類似から近世以降と考える。

SK 8 (図9) E 6区にある。2m×1m深さ0.3m程の方形土坑が2基接した形をしている。焼土・炭を多量に含み、ふいご羽口などの鍛冶関係遺物が出土している。平安時代。

SK 9~17・34・35 (図7) 動物の落とし穴と考えられている土坑である。プランは略隅丸長方形で長辺1m内外、短辺



- 1 黒灰色土 3 黒灰色土 黄色粘質土細粒を均一に含む。
2 黒灰色土 焼土多含 4 黒灰色土 黄色粘質土ブロック含む。

図5 烧土坑 SK 2 1:40

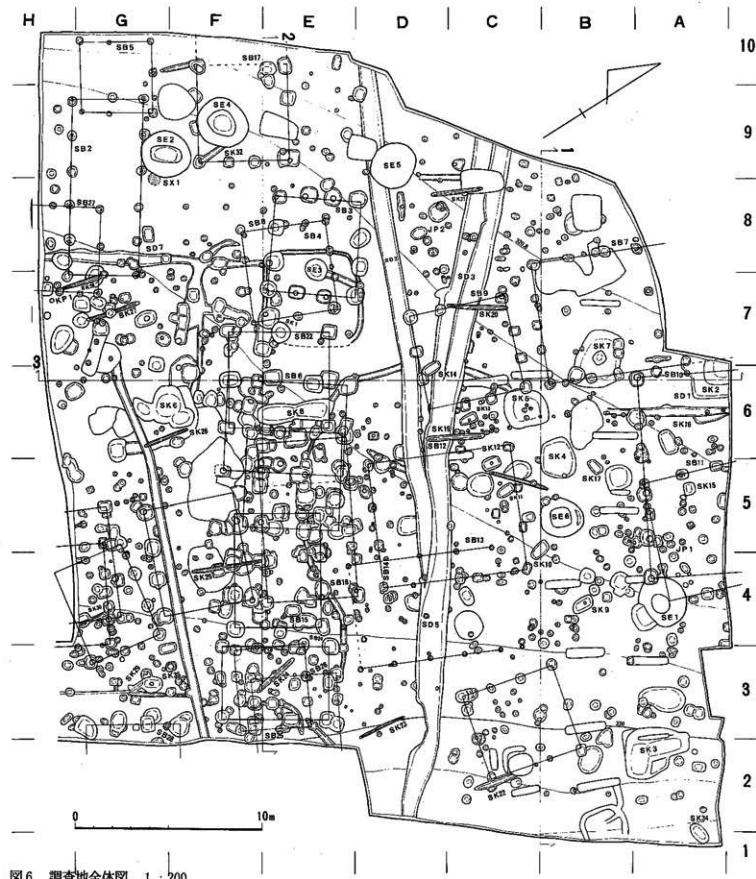
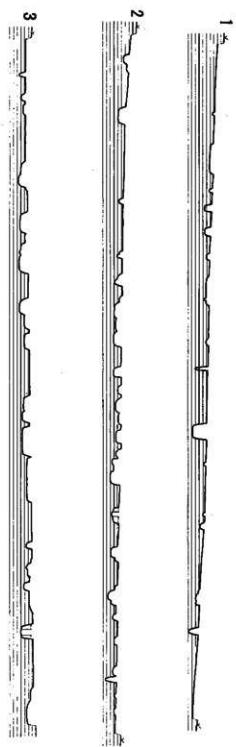


図6 調査地全体図 1:200

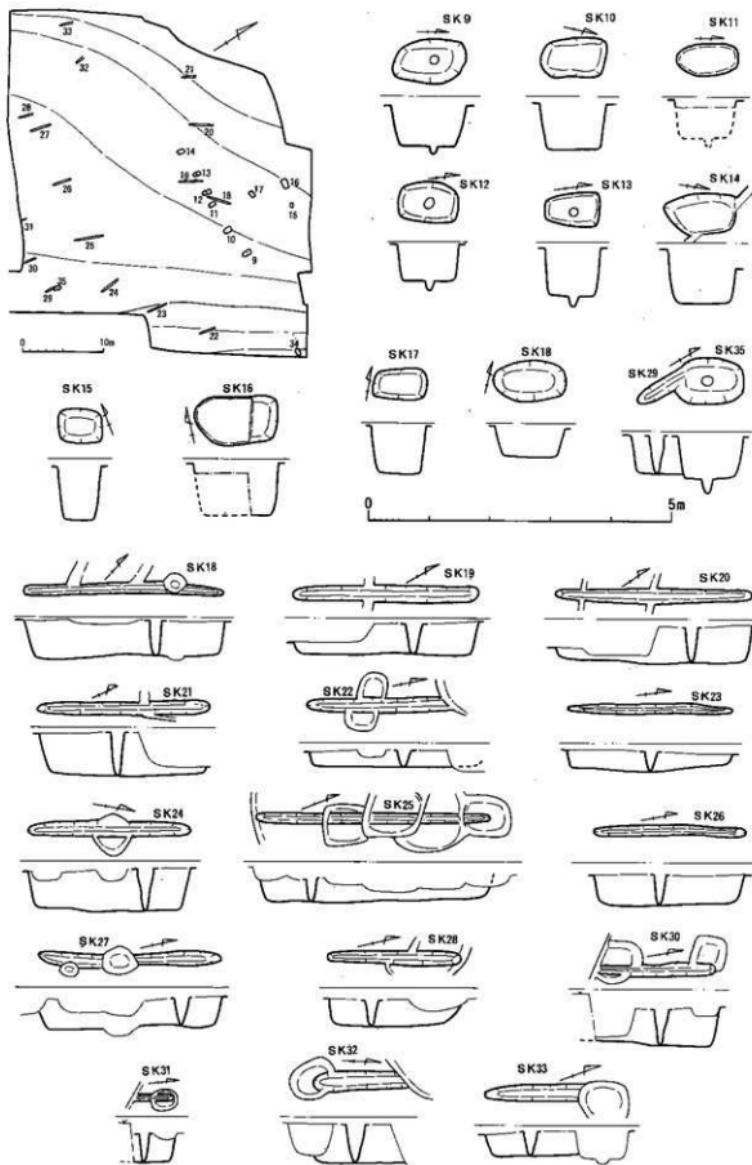


図7 繩文時代の土坑 1 : 80

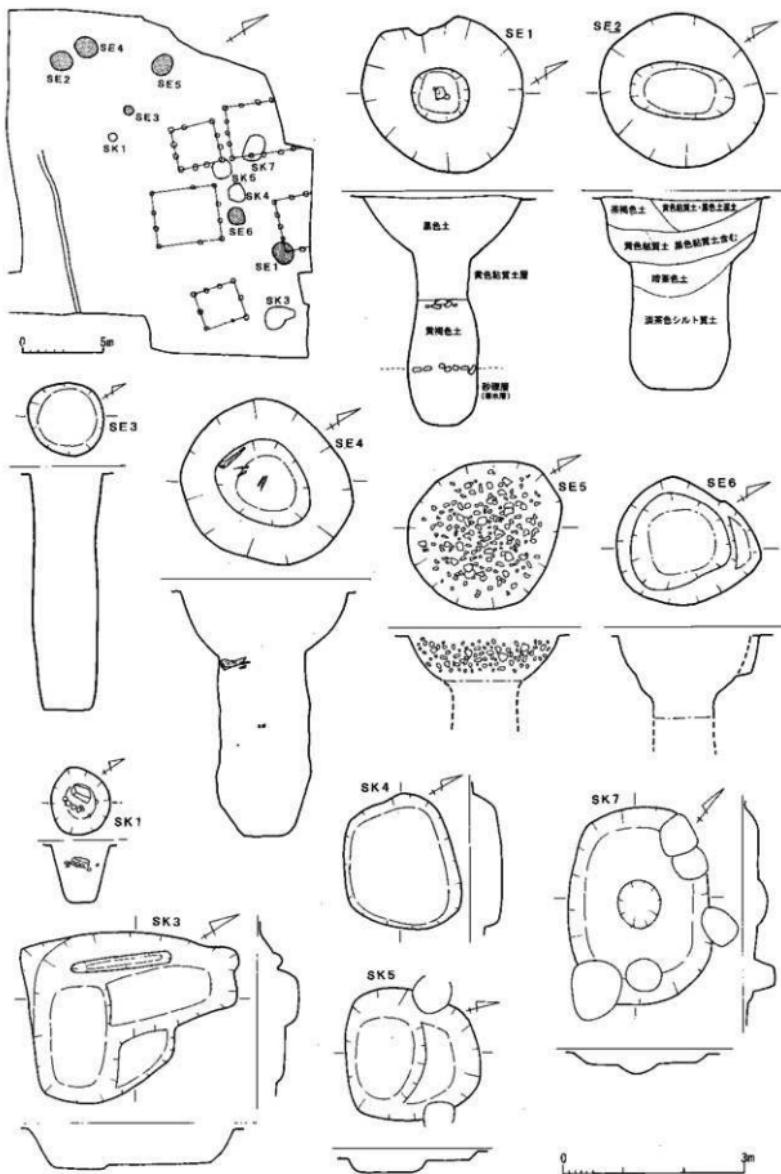


図8 近世の井戸・土坑 1 : 80

0.6m内外をはかる。底面に小穴をもつものがある。逆さ杭を立てた跡だろう。SK 9~14はほぼ等高線に斜行する方向で扇形に並んでいる。SK 35は溝状土坑SK 29と重複している。出土遺物はないが他の遺跡などの類例から縄文時代の所産と考えておく。

S K 18~33 (図7) 溝状土坑といわれ、脚の細長い鹿などの動物の落とし穴

と考えられている土坑である。長約1.5~4mをはかり、3m内外のものが多い。横断面形は上端からゆるやかに細くなる形のものが一般的だが、中には路漏斗状に中位でくびれるものもある。縦断面形はほぼ隅丸の逆台形だが、底面は端が深いものやまん中が少し深いものなどわずかな凹凸がある。SK 18~21、SK 22~28、SK 29~31、SK 32~33、と4列になって、等高線に斜行する形で扇形に並んでいる。出土遺物はないが縄文時代の所産と考えておく。

J P 1 (PL 5) A 5区にある。φ38cmの円形プランの小ビットで、深さは約20cm。検出面上端から5cm程下位で、縄文中期初頭の土器口縁部片が出土している。

J P 2 (PL 5) D 8区にある。長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形プランのビットで、深さ約20cm。底面から約5cm上位で縄文土器底部片が出土している。

K P 1 (図10) G 7区にある。φ約40cmの略円形プランのビットで、深さ約30cm。ビット中央から、古墳時代の土師器壺が大小2個、大を上に小を下にして重ねた状態で出土している。土器観察から柱穴と考えられる。

S X 1 (PL 6) G 8区にある。SE 2の南辺に接して古墳時代の高壺が数個体、0.8×0.5mの範囲に集中している遺構である。表土除去後すぐに検出されたこと、黒色土上にあったことか

ら、後世の削平を考慮したとしてもともと深い穴に入れられていたものではなく、当時の生活面に置かれたものと推定される。高壺は後世の削平や攪乱のためか完形に復元できるものはなく、また置かれた当時の状態を復元できるような出土状態ではない。しかし高壺のみが集中していることから祭祀遺構と考えている。

2 溝 (図6)

SD 1・SD 6 SD 1はA・B 6区にあり、SD 6はC 6区からゆるやかにカーブしてE 3区へ続く溝であるが、埋土、形状などから一連の溝と考えている。幅は20~40cm。深さは15~30cm。断面形は「U」字形。平安時代の鍛冶関係土坑SK 2および大形掘立柱建物柱穴に切られる。古墳時代のものか。

SD 2・SD 3・SD 5 調査地中央のD・C区を等高線に直交して西から東へ続く。SD 2とSD 3

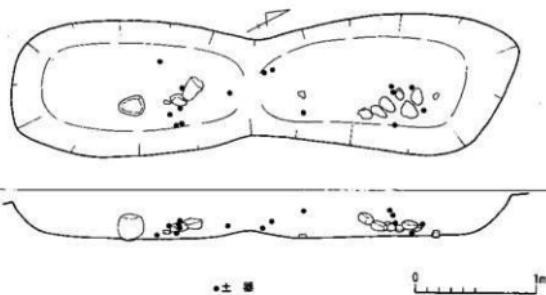


図9 焼土坑 SK 8 1:40

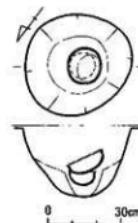


図10 土器埋納ビット K P 1 1:20

はD 4区で合流してSD 5となるが両者の切り合いは土層観察ではよくわからなかった。同時並存の可能性もある。SD 3は2段になっており2回の掘り替えが認められ、北側の深い方が新しい。いずれも断面逆台形で、幅は1~1.5mをはかる。遺物の出土はSD 5のD 4・5区に多く、SD 2・3は概して少ない。出土品は大半が古墳時代のもので、ごく少量の近世磁器類が混じるが、近世磁器類は溝と重複する柱穴出土品と推察され、当溝は古墳時代のものと考えている。

SD 4 G 6区から等高線に直交してF 3区へ直線的に続く。断面形は稜の立つ逆台形で底面は平らである。幅は約0.5m。西端は擾乱坑にぶつかって途切れているが、徐々に浅くなって終わるのではない。出土遺物は近世陶磁器類が多い。近世以降のものと考えている。

SD 7 E~G 7区にある。竪穴住居SB 4から南へ延びる1本にF 8区で西へ延びる1本が直交し、F 7区で北へ延びる短い1本がつく。東はF 6区で土坑にぶつかって途切れる。断面形は底の丸い「V」字形だが、東西の溝は浅く「U」字形である。出土遺物は古墳時代のものが中心である。

3 竪穴住居(図11)

SB 4 E 7・8区にある。遺存状態が悪く、検出面からの深さはわずかで、周溝のみ確認できたところもある。プランは一辺約5.5mの隅丸方形で、西側がややふくらむ。主柱穴は検出されていない。住跡東端にカマド跡らしき焼土が認められた。床も削平されたためか貼床等の施設は確認されていない。古墳時代の土器が多く出土している。SB 3・SB 8・SB 22・SE 3・SK 1に切られる。

4 掘立柱建物

掘立柱建物は全部で26棟検出されている。しかし現地で検討したものに、調査後に机上で復元したもの(SB 23~27)もある。特にE・F 3~6区の柱穴密集地では検討復元した建物柱穴以外にも多くの柱穴が残されており、また擾乱坑で多くの柱穴が削平されたと推測されるので、さらに数棟の建物が存在したと考えている。また、推定復元した建物も、柱穴の形状や方向などの比較検討から最も可能性の高い組み合わせを考えて建物と推定している。

以下個々の説明をするが、便宜上A地区側(図面右側)を北とする。また建物の主軸の傾きについては、東西方向の地区割基準線(図面縦の線)を基準にして、南北の振れを述べる。

SB 2(図11) G 8・9区にある。南北2間(3.8m)、東西5間(9.5m)の建物で、柱間寸法は西側柱列が1.6mと2.2mの他は1.9m等間である。主軸はW 2° N。柱掘形はφ50cmの円形プランで深さは40~60cm。柱抜きとり穴は確認できたものが多く、その直径は約15cmである。SE 2に切られる。柱抜きとり穴から平安時代の土器が大破片で出土しており、平安時代の建物と考えたい。

SB 3(図11) E 7・8区にある。南北3間(4.5m)東西3間(5.1m)の建物で、柱間寸法は南北が1.5m等間、東西は西から1.8・1.8・1.5m。主軸はW 4° N。柱掘形は梢円形に近い隅丸方形プランで、一辺約1m、深さ約50cmをはかる。柱根跡は直径約20cm。柱掘形埋土は黄色粘質土と黒色土の混土。SB 4・SB 8を切る。

SB 5(図11) G 9・10区にある。南北2間(3.8m)東西2間(3.8m)の建物で、柱間寸法は南北が南から1.5・2.3m、東西が西から1.7・2.1mと不揃いである。主軸はW 1° S。南側柱列中央柱穴は検出されていない。柱掘形は円形と隅丸方形プランがあり、大きさは20~40cmと小さく、深さ20cm以下で浅い。柱根跡が北側柱中央で検出されておりφ13cmと小さい。埋土はやや灰色がかった黒色土で、他の切り合い関係にある柱穴をみると最も新しい柱穴埋土に似ている。出土遺物はない。

SB 6(図11) E・F 5・6区にある。南北3間(6.6m)東西2間(4.8m)の建物で、柱間寸法

は南北が $2.1 \sim 2.4 \sim 2.1$ m、東西が $2.4 \sim 2.4$ mをはかる。主軸はW 4° N。柱掘形は南北に長い隅丸長方形プランで、長辺 $1 \sim 1.2$ m、短辺 $0.6 \sim 1$ m、深さは $50 \sim 60$ cm。柱根跡は東側柱列で確認されており直径 30 cmをはかり大きい。S B22を切る。柱掘形および柱抜きとり穴に焼土が多量に入っている柱穴が多いので、平安時代の鍛冶造構であるSK 8の廃絶以降の建物と考えられる。

S B7 (図12) B 7 区を中心にあり北は調査地外へ続く。南北4間 (6.3 m) 東西4間以上 (7.5 m以上) の建物で、柱間寸法は南北が南から $2.1 \sim 1.7 \sim 2.0 \sim 1.7$ m、東西が西から $1.7 \sim 1.35 \sim 1.35 \sim 1.9$ mと不揃いである。主軸はW 8° S。柱掘形は隅丸長方形プランだが、建物の方向と辺の方向が合わない柱穴もみられ柱間寸法同様不揃いである。一辺の大きさは $0.5 \sim 0.7$ m、深さ $30 \sim 50$ cm。柱根跡は東側柱列で2ヶ所確認され直径 18 cmをはかる。出土遺物は少ないが近世土坑SK 7を切っているので、近世以降の建物と推定される。

S B8 (図11) E・F 7・8 区にある。南北2間 (4.5 m) 東西3間 (4.8 m) の建物で、柱間寸法は南北が南から $2.4 \sim 2.1$ m、東西が西から $1.5 \sim 1.5 \sim 1.8$ m。主軸はW 7° S。柱掘形は直径 $0.3 \sim 0.5$ mの円形プランで、深さ $40 \sim 50$ cm。柱根跡は明瞭ではない。S B4を切り、S B3に切られる。出土遺物は少ないが、S B2との類似性から平安時代の建物と考えている。

S B9 (図12) C・D 6・7 区にある。南北3間 (5.3 m) 東西3間 (5.0 m) の建物で、柱間寸法は南北が南から $1.9 \sim 1.5 \sim 1.9$ m、東西が西から $1.8 \sim 1.6 \sim 1.6$ m。主軸はW 14° S。柱掘形は一辺 $0.5 \sim 0.7$ mの隅丸長方形プランで、深さは $40 \sim 50$ cm。柱根跡は東側柱列で確認され直径 15 cmをはかる。出土遺物は西側柱列の柱穴掘形埋土から近世磁器が出土している。近世以降の建物と考える。SK 5との切り合い関係は不明。

S B10 (図14) A・B 4～6 区にある。柱根跡が明瞭な大形柱穴6個が一列確認されているだけなので建物ではなく柵かもしれないが、柵にはては柱穴が大きく深い感があるので調査地外へ延びる建物と想定しておいた。柱間寸法は西から $2.1 \sim 2.1 \sim 2.1 \sim 2.4 \sim 2.1$ mと7尺あるいは8尺間隔である。柱列から調査地北端までは5 mもあって、北へ延びるにしても柱間が長すぎる。母屋部分が礎石の建物を想定すべきだろうか。主軸はW 5° S。柱掘形は $0.7 \sim 1.0$ mの楕円形に近い隅丸方形プランで、深さ約1 m。柱根跡は直径 $35 \sim 40$ cmと大きい。出土遺物は西端柱穴柱根跡から平安時代の須恵器蓋小片が出土しているのみである。SD 1を切り、S B11、SE 1に切られる。

S B11 (図14) A 4・5 区にあり調査地外へ続く。南北2間以上 (4.2 m以上) 東西4間 (6.4 m) の建物で、柱間寸法は南北が 2.1 m、東西が 1.6 m等間である。主軸はW 12° S。柱掘形は一辺 $0.5 \sim 0.7$ mの隅丸長方形プランで、深さ約 50 cm。柱根跡は直径 15 cm。S B10を切る。出土遺物は少なく年代推定をしかねるが主軸方向、柱間寸法、柱穴の形状などがSB 7・SB 9に類似しているので、同様の近世以降としておく。

S B12 (図14) C・D 4～6 区にある。南北3間 (7.8 m) 東西3間 (6.7 m) の建物で、柱間寸法は南北が $2.7 \sim 2.4 \sim 2.7$ m、東西が $2.3 \sim 2.1 \sim 2.3$ mと柱穴の大きさの割に柱間寸法が大きい。SD 2・SD 5と重複する部分の柱穴は切り合い関係をたしかめないうちにSD 5を掘り下げたため柱穴は検出していない。主軸はW 8° S。柱掘形は一辺 $0.4 \sim 0.6$ mの隅丸長方形プランで、深さ $40 \sim 50$ 。柱根跡は確認されていない。出土遺物は少ないので、先のS B11と同様の特長から近世以降の建物としておく。

S B13 (図13・14) C～E 3～5 区にありSD 5をまたいでいる。直径約 0.3 mと小さい割に深さ $0.5 \sim 1$ mと深い柱穴が 1.8 m程の間隔で並行して2列が並んでるので一応S B13と呼称しておいた。東側柱列は6間分 (10.7 m)、5.5 m隔てた西側柱列は6間分 (12.0 m) が確認されている。そして両者をつなぐかのように2列の柱列がある。主軸はW 7° S。出土遺物がなく年代はわからない。SD 5との切り合い関係は不明。

S B14 (図14) B・C 2・3 区にある。南北3間 (5.1 m) 東西2間 (4.8 m) の建物で、柱間寸法

は南北1.7 m、東西2.4 m等間である。主軸はW19° S。柱掘形は一辺0.5 ~ 0.6 mの隅丸方形で、深さは0.2 ~ 0.5 m。斜面に作られているが柱穴の底レベルは一定である。柱根跡は直径約15cmと小さい。出土遺物はないが、特長から近世以降と考えておく。

S B15(図13) E・F 4・5区にある。南北2間(4.8 m)東西3間(6.3 m)の大形柱穴の建物で、柱間寸法は南北2.4 m、東西2.1 m等間である。主軸はW30' S。柱掘形は0.7 ~ 1.0 mの隅丸長方形で深さ0.5 ~ 0.6 m。掘形埋土に焼土・炭を含んでいる。柱根跡は確認していない。

S B16(図13) F・G 4・5区にある。南北2間(4.8 m)東西3間(5.85m)と推定される大形柱穴の建物で、柱間寸法は南北が南から2.7・2.1 m、東西は1.95m等間に推定される。大形柱穴の建物は基本的に0.3 mで割り切れる柱間寸法でしかも等間隔であるのに対しS B16はやや異なっている。主軸はW 11° S。柱掘形は一辺0.8 ~ 1.0 mの楕円形に近い隅丸方形プランで深さ0.5 ~ 0.7 m。柱根跡は2ヶ所で検出され直径約25cmをはかる。埋土に焼土・炭を多く含む柱穴がある。

S B17(図11) E・F 9・10区にある。南北3間(4.8 m)東西3間(5.1 m)に推定される大形柱穴の建物である。西側柱列は確認されていないが、S B3との類似性から3間×3間であろう。柱間寸法は南北が1.6 m、東西が1.7 m等間に推定復元されるが、柱根跡がないので東西は1.8・1.5・1.8 m、南北は1.65・1.5・1.65 mにも復元できる。主軸はW 1° S。柱掘形は一辺0.5 ~ 1.1 mの隅丸方形プランで、東側柱列中央の2基はやや小さめである。深さは0.5 ~ 0.7 mで四隅が深い。柱根跡が東北隅柱穴で、柱抜き取り穴が西南隅柱穴で確認されており直径は約20cm。S E 4区に切られる。

S B18(図13) E 4 ~ 6区にある。南北2間(4.8 m)東西4間(8.4 m)に推定復元される大形柱穴の建物であるが、重複してあるS B15が2間×3間でしかも柱間寸法がS B18と等しいことや、南西隅柱穴が他に比べて浅いことを考えれば、S B18は西の1間分を除いた2間×3間の建物とも考えられる。柱間寸法は南北が2.4 m等間、東西が2.1 m等間である。主軸はW 3° S。柱掘形は一辺0.7 ~ 1.0 mの隅丸長方形プランで、深さは0.4 ~ 0.6 m。

S B19(図13) G 4・5区にあり調査地外へ続く。東西3間(6.0 m)・南北1間(2.1 m)分の柱穴を確認している。柱間寸法は西から2.1・1.8・2.1 m、主軸はW 7° S。柱掘形は一辺0.5 ~ 0.7 mのわりときっちりとした隅丸方形プランで、掘形内に柱をおさえる人頭大の割石がある。深さは0.4 ~ 0.6 mで両端の柱穴がより深い。S B20・21を切る。

S B20(図13) G 3 ~ 5区にある。南北2間(3.9 m)東西3間(5.4 m)の建物で、柱間寸法は南北が南から1.8・2.1 m、東西は1.8 m等間である。主軸はW23° S。柱掘形は直径0.6 mの円形プランで、深さ0.4 ~ 0.6 mをはかり隅の柱穴がより深い。S B19に切られる。年代は確定できないが柱穴の形状から平安時代のものとしておく。

S B21(図13) G 3・4区にあり調査地外へ続くものと思われる。東西3間(5.4 m)分の柱穴を確認している。柱間寸法は1.8 m、等間。主軸はW 4° S。柱掘形は一辺0.5 ~ 0.6 mのわりときっちりとした隅丸方形プランで、深さ0.3 ~ 0.4 m。柱根跡は西端柱穴で確認され、直径20cmをはかる。

S B22(図11) E・F 6・7区にある。南北3間(5.4 m)東西2間(5.1 m)に推定復元される大形柱穴の建物で、柱間寸法は南北1.8 m、東西2.55m等間である。主軸はW20' S。柱掘形は一辺0.6 ~ 1.0 mの隅丸方形プランで深さ0.2 ~ 0.7 mをはかるが、東側柱列中央の2基は小さく浅いし、西側柱列中央は1基のみを検出している。S B 6に切られる。掘形埋土に焼土・炭を含む。

S B23(図13) E・F 5・6区にある。南北3間(5.1 m)東西2ないし3間(5.1 m)に推定復元される大形柱穴の建物である。南側柱列と北側柱列の西から3番目の柱穴がやや南へずれるので、これをはずすと東西2間となる。西から第2列目を推定すれば廂をもつ建物となる。柱間寸法は東西が西から1.8・1.65・1.65(3.3 m)、南北が、西側柱列が南から1.8・1.8・1.5 m、西第2列目および東側柱列は南から1.8・1.5・1.8 m。主軸はW 2° 30' N。柱掘形は一辺0.8 ~ 1.0 mの楕円形に近い隅丸方形プラン

ンで、深さ0.3～0.6 mをはかり、四隅の柱穴がより深い。掘形埋土に焼土・炭を含む。

S B24(図13) E・F 3区にある。南北3間(5.7 m)東西2間(3.9 m)に推定復元される大形柱穴の建物で、柱間寸法は南北が1.8・2.1・1.8 m、東西が西から1.8・2.1 m。なお、建物中央の柱穴をひろえれば総柱の建物にも復元できる。主軸はW 1° N。柱掘形は一辺0.7～1.0 mの隅丸方形プランで深さは0.3～0.5 m。四隅の柱穴が深い。S B25に切られS B26を切る。

S B25(図13) E・F 3区にある。南北2間(3.9 m)東西3間(4.2 m)に推定復元される建物で、柱穴はやや小ぶりである。柱間寸法は南北が南から2.4・1.5 m、東西が西から1.5・1.2・1.5 m。主軸はW 5° S。柱穴掘形は一辺0.5～0.6 mの隅丸方形プランで深さ約0.4 m。埋土は重複するS B24・26が黄色粘質土ブロックまじりであるのに対して、黒色土が中心である。S B24を切る。

S B26(図13) E・F 2・3区にあり調査地外へ続く。南北3間(4.5 m)東西2間(2.8 m)以上に推定復元される建物である。柱間寸法は南北が1.5 m等間、東西が1.4 m等間である。主軸はW 2° S。柱穴掘形は一辺0.5～0.7 mの隅丸長方形プランであるが、規模はやや不規則である。S B24に切られる。

S B27(図11) G・H 7・8区にある。南北1間(2.6 m)以上、東西2間(4.5 m)の建物で調査地外へ続く。柱間寸法は南北が2.6 m、東西が西から2.1・2.4 m。中央柱穴をひろえれば総柱の建物にも復元できる。主軸はW 4° N。柱穴掘形は直径0.4～0.5 mの円形プランで深さ0.5～0.6 m。柱穴の規模・形状・柱間寸法とも重複するS B2によく似ているので平安時代の建物と考えておく。

S B28(図13) F・G 3区にあり調査地外へ延びる。南北3間(5.1 m)東西1間に以上に推定復元される大形柱穴の建物で、柱間寸法は1.8・1.5・1.8 m。主軸はW 1° S。柱穴掘形は一辺0.8～1.2 mの大きな隅丸長方形プランで深さ0.4～0.7 mで両端がより深い。

5 井戸(図8)

S E 1 A 4区にある。漏斗状に掘り込まれた素掘りの井戸で、上段直径が2.5 m、下段直径が約1.0 m、深さ3.8 mをはかる。上端から1.7 m下と2.8 m下には埋土の境があり石が置かれていて、叩かれたように土が締まっていた。井戸廃棄時に底をさらえて一気に埋め戻したのであろうか、出土遺物は土器小片5片とごく少なく埋土も均一である。構造・規模・埋土がS E 4～6に類似するので近世以降とかんがえる。

S E 2 G・F 9区にある。漏斗状に掘り込まれた素掘り井戸だが、下段のプランは長椭円形である。上段直径約2.5 m、下段長径1.7 m短径0.9 m、深さ3.1 mをはかる。上層の埋土は遺物を含まない黄色粘質土と茶褐色土・黒色土との混土で、この井戸も一気に埋め戻された感がある。出土遺物は南接するS X 1の高窓が上層から出土しているのみである。S E 1同様近世以降と考えている。

S E 3 E 7・8区にある。唯一の直っすぐに掘られた素掘り井戸で、直径約1.2 m、深さ3.9 mをはかる。中層以下から五輪塔の空風輪4個・石臼・木製品・漆製品のはかに美濃・志野系の江戸前期の陶磁器が出土している。

S E 4 F 9区にある。漏斗状に掘り込まれた素掘り井戸で、S E 2と同様下段のプランは楕円形に近い。上段長径2.8 m短径2.6 m、下段長径1.6 m短径1.3 m、深さ4 mをはかる。埋土はS E 2同様上層は地山の黄色粘質土を主体とした土で一気に埋め戻された感がある。下段以下から板状・棒状の木製品や自然木が出土しており、また桃山～江戸時代の美濃・志野系の陶磁器類が出土している。

S E 5 D 9区にある。漏斗状に掘り込まれていると推測される井戸で、底まで調査していない。上段直径約2.5 mをはかる。上層には栗石が多数乱雜に入っている、その間で近世陶磁器類が出土している。

S E 6 B 5区にある。漏斗状に掘り込まれた素掘り井戸で、中段以下を調査していない。上段直径は約2.1 mをはかり、下段は隅丸方形プランで一辺約1 mをはかる。伊万里系の近世磁器類や、石製品が出土している。

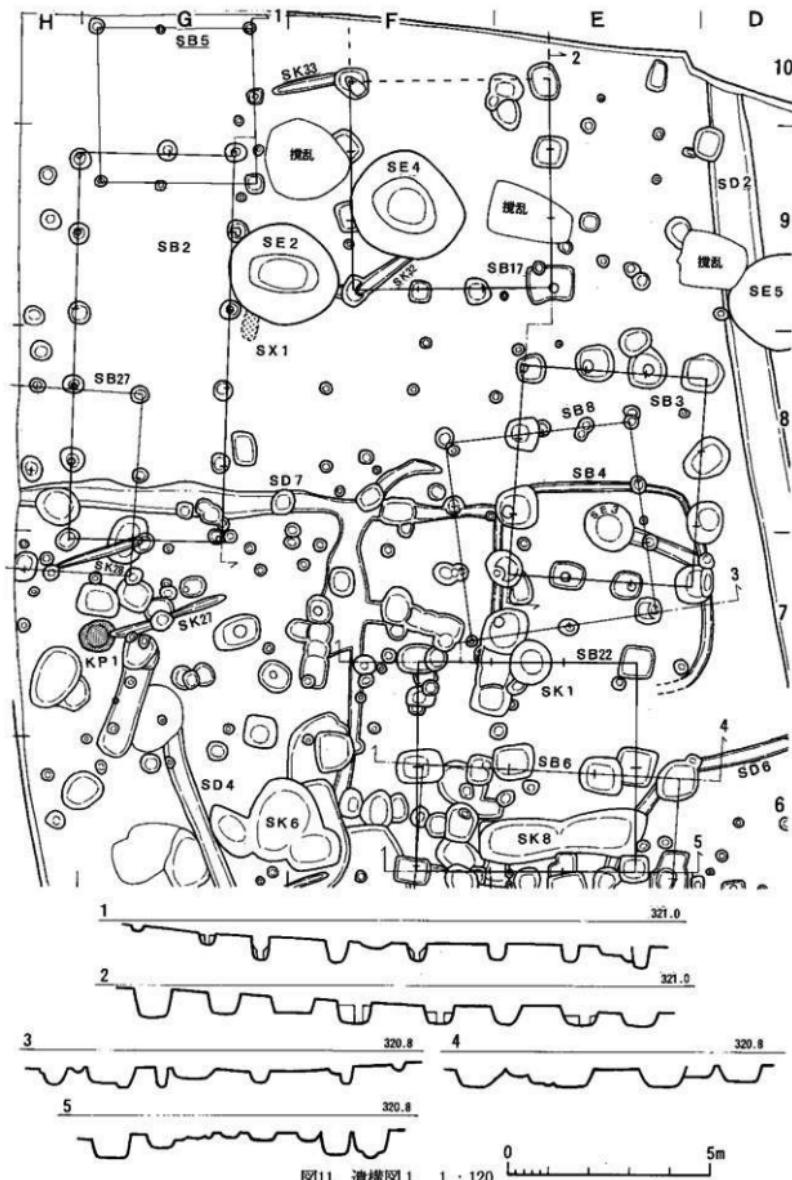


图11 造構図1 1:120

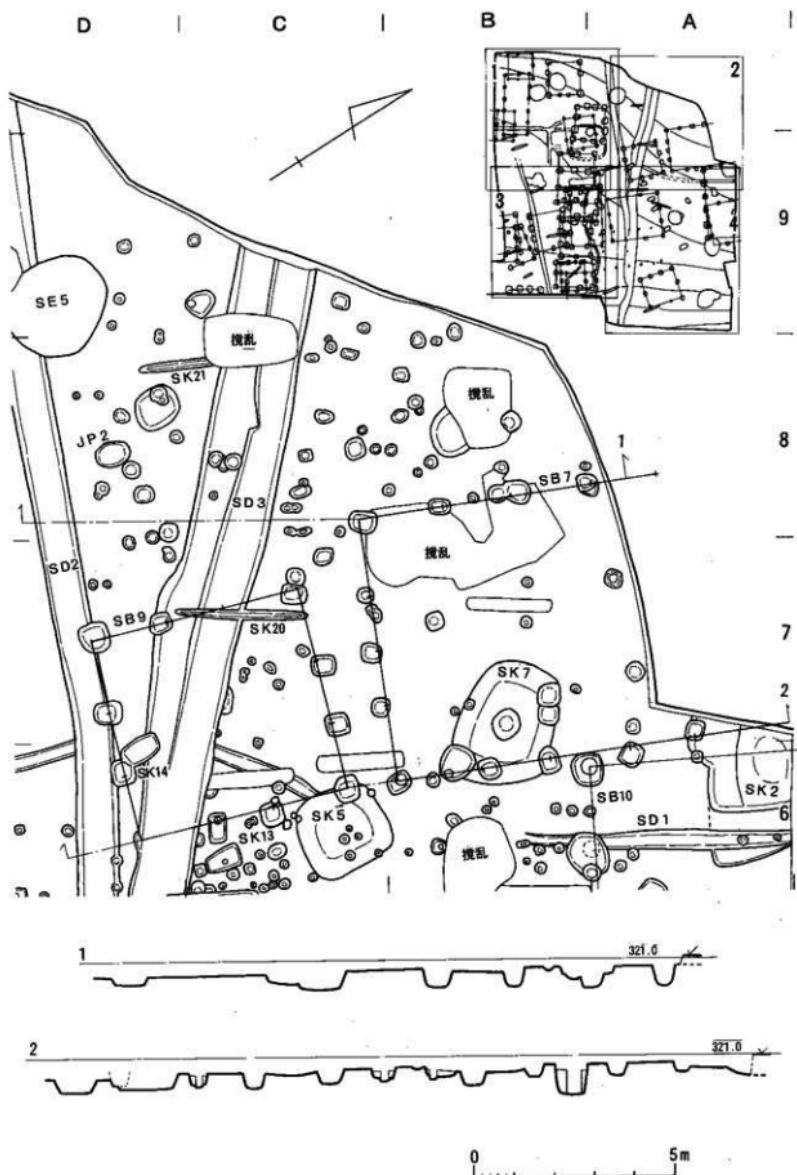


図12 遺構図 2 1 : 120

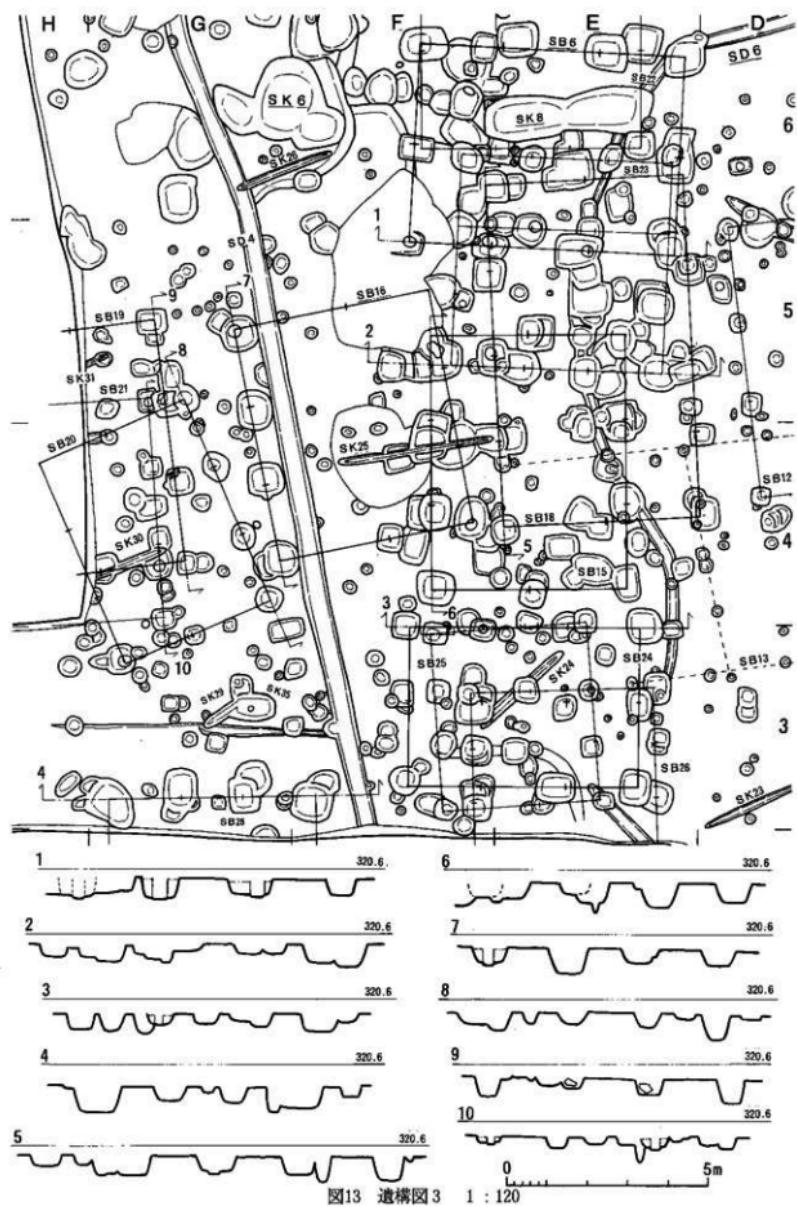


図13 遺構図3

1 : 120

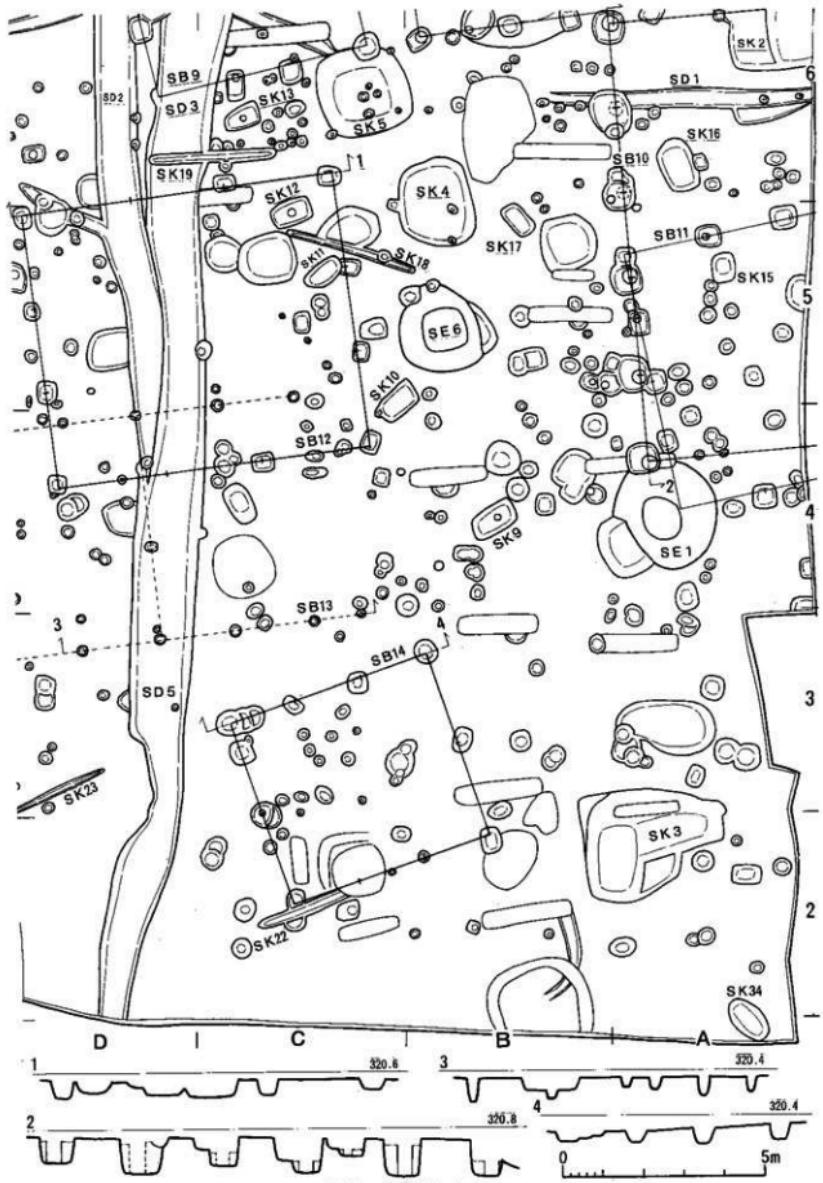


図14 遺構図4 1:120

第4章 遺物

1 旧石器

今回の調査で検出された石器は遺構の覆土内出土、及び表面採集によるものである。そのため、出土層は確認できなかった。おそらく、後世の遺構が包含層を攢乱したものと推測する。旧石器時代の所産と考えるが、縄文時代の石器が混入している可能性もある。

(1) 縦長剥片を素材とする石器類（1～8）

石刃技法によって製作された縦長剥片（石刃）を素材としたものである。石材は頁岩が用いられている。1は削器である。左側縁に刃部が作出されている。刃部の作出は背面から三回の剥離による。刃部角は100度をなす。また、背面には刃部の方向から数回の剥離によって、刃部を直線的に入っている。2は分厚い刃器である。打面部は左方向からの剥離によって、とり除かれている。やや湾曲する右側縁には不揃いな小剥離痕が認められる。3は彫器である。断面三角形の厚い石刃を素材とする。打面は背面からの剥離により、とり除かれている。この面を打面として、右側縁に二面の短いフルーティングが認められるが、刃部に相当する側縁が破損している。4～8は刃器と考えるが、破損部が多い。

(2) 横長剥片を素材とする石器等（9、11、13）

9は横長剥片の先端を刃部とした搔器である。刃部に磨耗痕が認められる。10は両側縁が断ち切られた剥片を素材としている。断ち切られたひとつの面を打面に調整剥離が認められる。搔器として利用されたものか。11は厚さの厚い横長剥片を素材とした搔器である。正面右側縁から左側縁にかけて、表裏から2ないし3回単位に交互の剥離が認められる。下端部には磨耗痕が認められる。12は不定形な搔器である。小形の横長剥片の先端に直線的な刃部が作出されている。

(3) 残核（14・15）

14、15は接合する。15は意図的に剥離されたものではなく、剥片剥離の際に生じた亀裂が原因となり、剥落したものと考えられる。

(4) 剥片（13・15～25）

13の大形の横長剥片以外は小形の剥片である。縦長のもの（16～19・21・22）と横長のもの（20・23～25）がある。

表1 石器計測表

番号	出土地	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	S D 4	削器	頁岩	(7.0)	(3.7)	1.6	(28)	破損多
2	使用痕を有する剥片	頁岩	7.8	3.4	2.2	32	
3	S D 5	彫器？	頁岩	7.2	2.7	1.8	26	破損多
4	S D 5	刃器	頁岩	(7.2)	(2.2)	1.2	(16)	破損多
5	刃器	硬質頁岩	8.8	3.9	2.0	42	
6	G - 7	刃器	安山岩	6.5	(3.0)	1.2	(14)	破損多
7	C - 5	刃器	硬質頁岩	6.1	3.8	1.0	(14)	破損多
8	S B 14 - P	刃器	頁岩	9.9	4.4	1.6	54	
9	搔器	安山岩	4.7	7.8	1.1	44	刃部摩耗
10	S B 10 - P	搔器	安山岩	1.6	6.2	0.8	8	
11	S B 18 - P	搔器	安山岩	5.4	5.8	2.1	52	刃部摩耗
12	S K 2	搔器	黒耀石	2.7	2.8	0.6	3	

番号	出土地	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13	B-4	剥片	安山岩	6.5	(6.8)	1.7	(77)	破損多
14	C-5・SK4	石核	黒耀石	3.1	3.5	4.6	29	
15	SB6・P2	剥片	黒耀石	2.1	1.5	1.1	2	接合
16	D-5	剥片	硬質頁岩	3.1	2.6	0.8	5	
17	C-5	剥片	黒耀石	4.2	3.1	1.0	9	
18	C-5・SK2	剥片	頁岩	3.5	2.1	1.0	2	
19	SK8	剥片	安山岩	3.1	2.6	0.8	4	
20	C-5・SK2	剥片	黒耀石	2.2	2.1	0.5	0.5	
21	C-5・SK3	剥片	黒耀石	(2.9)	1.8	0.6	(1.0)	
22	C-5・SK2	剥片	頁岩	3.6	2.5	0.9	3.5	
23	B-3	剥片	頁岩	(2.1)	2.5	0.4	(0.4)	
24	D-5・P2	剥片	黒耀石	1.8	2.8	0.6	2.7	
25	A-2・SK1	剥片	チャート	2.2	2.8	0.5	2.5	

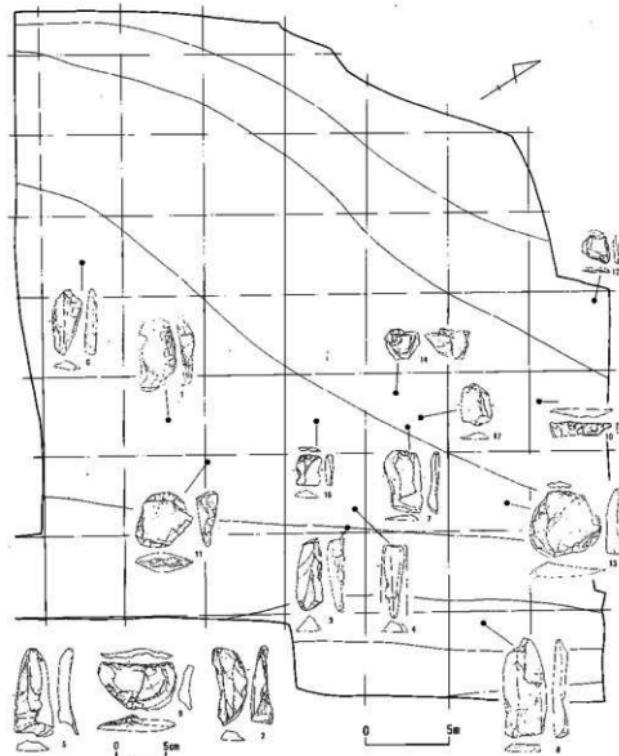


図15 旧石器分布図 1:300 石器 1:5

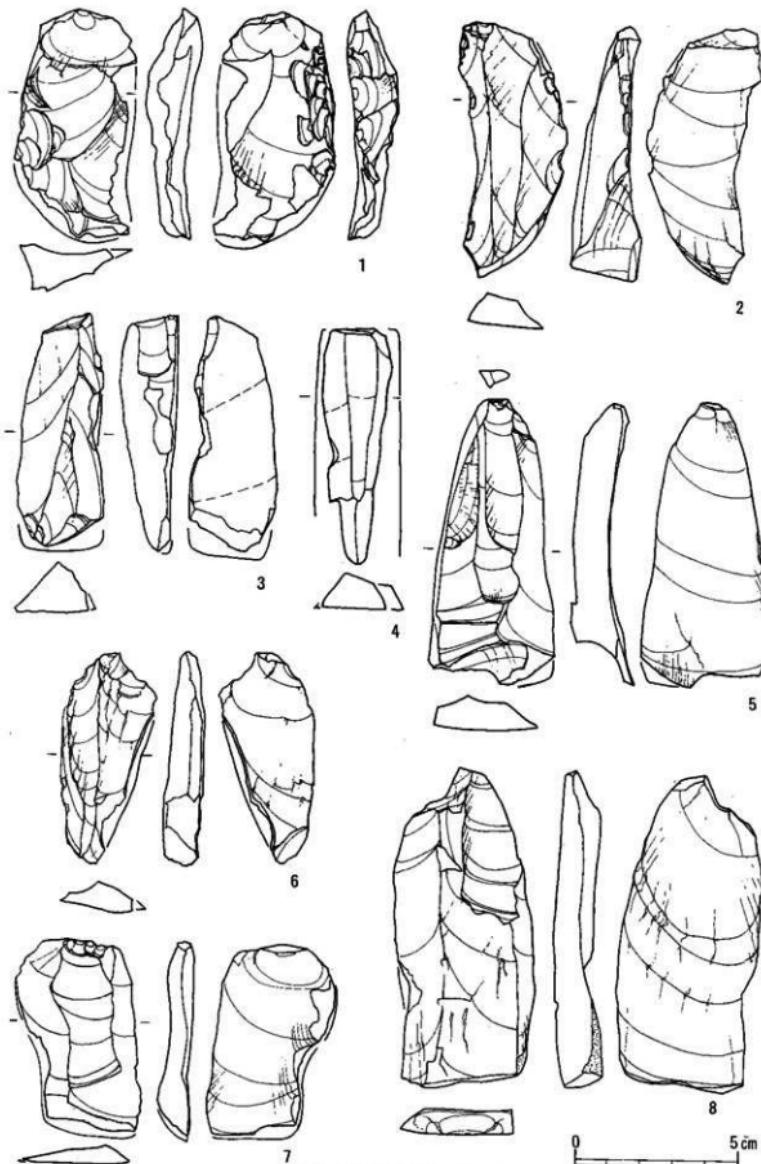


図16 石器実測図1 2 : 3

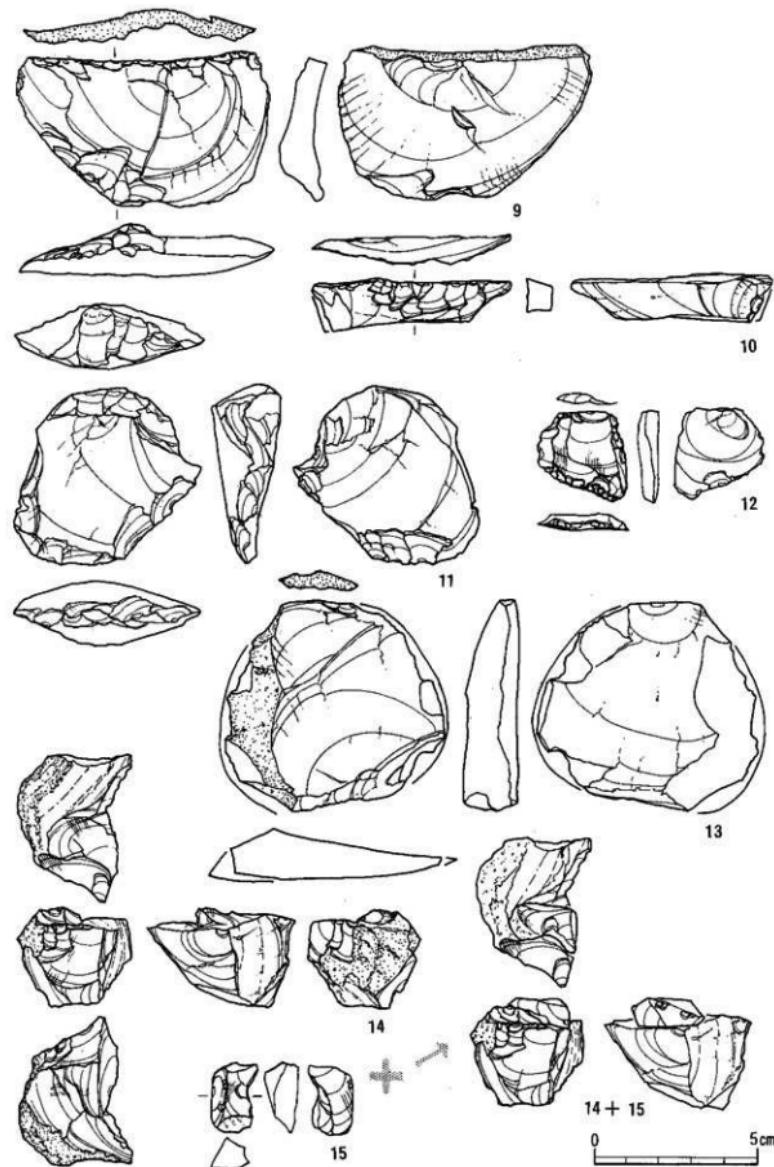


図17 石器実測図 2 : 3

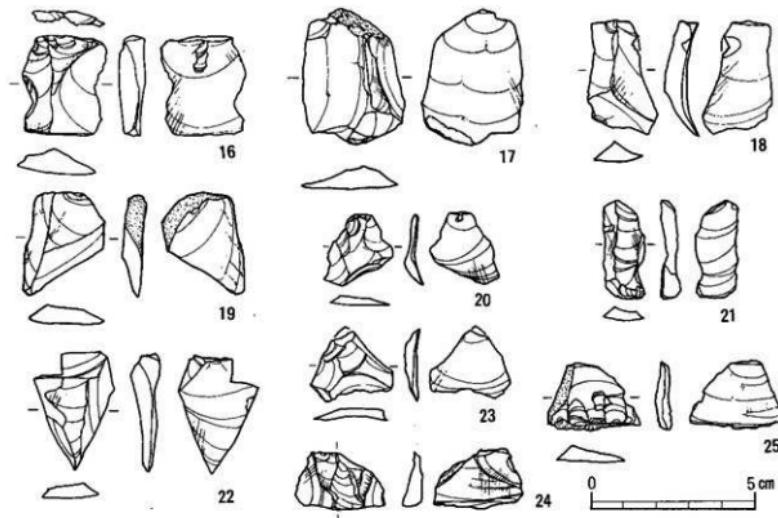


図18 石器実測図 3 2 : 3

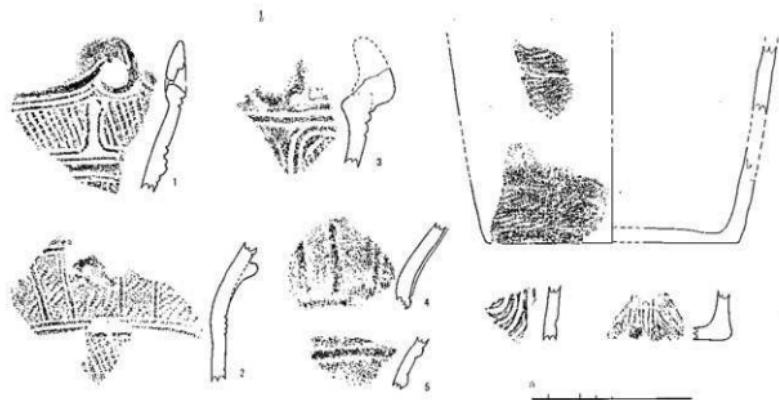


図19 縄文土器拓影 1 : 3

2 縄文時代

A 土器 (図18)

有尾遺跡は縄文時代前期有尾式の標式遺跡として著名だが、今回の調査では有尾式の土器は出土していない。

今回の調査では2か所のピットなどから少量の土器が出土している。

1・2はA 5区のJ P 1から出土した同一個体である。半截竹管による横位の半隆起線文で文様帯を区切り、その間に斜格子文と斜繩文とを交互に配する土器である。形態は頭部から口縁部にかけて開く深鉢であろう。斜格子文はまず右下りの半截竹管による平行条線を引いてからその上に左下りのヘラ状具による沈線を加える。斜繩文は縦位の半截竹管による条線で区切られる。頭部には把手状の小突起があり、口縁部は突出するうず巻をもちやや波状となる。胎土に金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が暗茶褐色である。この半截竹管による条線と斜格子文の多用は、北陸の新保・新崎式土器や関東の五領ヶ台式にみられるもので、当土器も中期前葉に置かれよう。

3～5も1・2と同系の土器と考えられる。いずれも金雲母を多量に含む。3はF 4区、4はD 8区、5はD 8区J P 2より出土している。

6はD 8区J P 2出土品で底部を中心に約20片ほどある。斜繩文を浅く施文している。胎土に金雲母を含んでいる。色調は茶色。残りが悪く磨滅がはげしい。5との共伴から中期前葉に置かれよう。

7はヘラない棒状具による沈線文が施されている。残りは良く、色調は淡褐色。D 6区出土。

8はヘラ状具による沈線が施された底部片で、焼成良好、赤褐色をしている。

B 石器 (図31 13・14)

13・14ともにくぼみ石で、中央に深い穴がある。14は側面にも使用痕がある。いずれも安山岩製。

注1 南久和『北陸の縄文時代中期の編年 他9編』 1985

3 古墳時代

古墳時代の遺物は調査地内まんべなく出土しており、量も各時代を通じて最も多い。しかし、住居跡等の良好な一括遺物はなく、年代は幅広い。古式須恵器は当地方初めての出土で注目される。

なお、今回報告した資料は十分な整理作業を経たものではない。しかし器種ごとにタイプのちがうものをそれぞれ抽出して図化しているので全体の傾向はうかがえると考えている。

A 土師器

高坏 (図19 1~20) 高坏には坏部が深い楕形のもの (1・2) と、上外方に開くもの (3~8) がある。坏部が深い楕形のもののうち1は屈曲部の段が明瞭だが2は不明瞭である。坏部が上外方に開くものは坏部の段が明瞭なもののは少ない。脚は「八」字状に開くもの (1・16) と有段のもの (11~15) がある。有段のものは脚柱が少し中ぶくれのもの (12・14) が目立つ。また脚の低いもの (17~20) もある。多くは内外面ともにていねいにヘラミガキされ、色調は赤褐色系統であるが、7はヘラミガキされておらず、8・15は内面が黒色処理されている。

1~4・11~14はG 8区の土器だまりS X 1出土品で一括性がある。市内照丘1号円形周溝遺構出土土器 (注1) と類似している。県内では長野市駒沢新町遺跡1号祭祀遺構出土品や、更埴市森2号墳出土土器に類似 (注2) (注3)

している。

壺（図19 21～30） 21～24は二重口縁壺の口縁部で、21・22は屈曲が弱く、23・24は屈曲が強い。いずれもていねいにヘラミガキされ赤橙色を呈する。二重口縁壺としては後出的なものである。25～27は口縁部が「く」字に外反するものでヘラミガキされているので壺に分類した。25は口縁端部がやや肥厚する。27は小形の壺で、表面赤橙色。28・29は直立する短い口縁部をもつ小形の壺で、28には肩部に焼成前的小孔がある。30は底部で、ていねいにヘラミガキされている。

坏（図20 31～55） 坏には口縁部が短く屈曲するもの（31～37）、口縁部がやや長いもの（38～42）、口縁部がより長くなり全体に扁平になるもの（43～48）、口縁部が直立ぎみで形態が壺に近いもの（49～51）、口縁部が屈曲しないもの（52・53）、須恵器坏を模倣したもの（54・55）がある。いずれも内面黒色処理されるものも含んでいるが、口縁部が短く屈曲するものには黒色処理されたものは少なく、口縁部が長くなり全体に扁平になるものには黒色処理されるものが多い。色調は口縁部が短く屈曲するものは赤味が強く茶色系で、口縁部が長いものは白色味が増し淡褐色～淡黄褐色系である。

31・32はH7区のKP1から32を下にして正位で重なって出土している。

これらの坏は、須恵器模倣の坏が出現し、黒色土器が出現する時期を中心に、その前後の年代と考えられる。

瓶（図20 56～60・図21 86・87） 瓶は底部を作らないタイプのものと思われる。ヘラケズリないしハケ調整が施される。58～60は把手をもつ。86・87はヘラミガキの施された直線的な胴部をもつと考えられるもので瓶の可能性が考えられる。

壺（図21 61～85） 壺は古墳時代後期に通有いわゆる長胴壺と考えられるものはみあたらない。また、古墳時代初頭にみられる東海地方や北陸地方の影響をうけた有段口縁の壺もみられない。口縁部の形態は種々あるが、概して短く「く」の字形に屈曲するものである。胴部は61～75までは球形ないし卵形と考えられるが、76～83は張りが少なくなり長胴壺に近い形態になるものと思われる。調整はヘラケズリないしハケが目立ち、口縁部は横ナデする。色調は黄灰色～淡褐色系統であり、高环や壺などとは一線を画している。

B 須恵器

須恵器は口縁部片の図化できるものはすべて図化した。

甌（図22 91～94） いわゆる古式須恵器ないし初期須恵器と呼ばれるもので、扁平な胴部に短くくびれた口頸部がつく。稜はシャープである。口頸部および胴部に細かい波状文をもつ。外面は黒灰色を呈し、断面は暗紫色を呈する。陶邑TK208号窯式期までのものと考えられ5世紀段階のものであろう。

甌（図22 95・96・101～106） 95・96は甌の口頸部片である。口縁端部が肥厚する。95は灰色、96は暗灰色を呈する。

101～106は古墳時代と考えている甌の体部片と口頸部片（103）である。体部片はいずれも外面に平行タタキを施し、101・106は後にカキ目を加えている。内面はナデないしハケ（101）で平滑に仕上げられている。101・102・104は外面は黒灰色を呈し断面は暗紫色を呈しており、古式須恵器の91～94に共通する特色をもつ。

坏（図22 97～99） 97・98は坏蓋で、稜は突出しない。TK47～MT15号窯式期と考えられる。99は坏身で、口縁部の突出は小さいものと推定され6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。

高坏（図22 100） 脚据が大きく広がり脚柱部が細い形態のもので、三角形のスカシ孔をもつ。6世紀後半のものであろう。

注1 『長野県史』 考古資料編全一巻四 1988

注2 注1と同じ

注3 『森将軍塚古墳』 VI 更埴市教育委員会 1986

注4 田辺昭三『陶邑古窯址群』 I 平安学園考古クラブ 1966

4 平安時代

平安時代の遺物は焼土拵SK2、SK8や柱穴埋土から主として出土している。量はコンテナに3箱ぐらいであり少ないので、年代的には一時期でなく長きにわたる。

A 土師器（図23 107～118）

壺（107～116） 107は奈良時代の壺の特色を残している。外底面にヘラケズリの跡を残すほかでいねいにヘラミガキされている。口径18.6cm。108は外面がヘラケズリで内面はロクロナデ。口径16.2cm、器高4.8cmと大きい。SK2出土。109～112は黒色土器である。109は深い形態の壺で古相を呈するが、底部にロクロ糸切り痕をそのまま残す。口径16.2cm、器高4.5cm。110は外底面がヘラケズリ、111はロクロ糸切り痕をそのまま残す。112は高台が付く小皿と推定される。113～116は外底面にロクロ糸切り痕をそのまま残す新相を呈する壺である。口径12～13cm、器高3～3.5cmと小型化している。

甕（117～118） 117・118ともにSK2出土品。117は口縁端部が折り返されて内傾する越後型の甕である。口径18.0cm。118は口縁端部を丸くおさめる。

B 須恵器・施釉陶器（図23 119～143・図24 144～155）

壺（119～127） 壺は高台のつかないもの（119～124）と高台の付くもの（125～127）がある。高台の付かないもので底部が残っているものについてはいずれも外底面にロクロ糸切り痕をそのまま残している。また作りはシャープさを欠いている。

高台の付くと推定される125は作りがシャープで古相を呈している。126も高台の形態は奈良時代的である。

蓋（128～132） 128は天井部にロクロケズリを加えている。129・132はSB10の柱痕跡から出土している。128～130は口縁端部が折り曲げられる形態と思われ、壺蓋と考えられる。131は壺蓋の可能性がある。

壺・瓶（133・134・137・139） 133は小壺である。134は壺ないし瓶の底部である。139は突帯付四耳壺で肩に自然軸がかかっている。137は長頸瓶の口頭部である。

甕（135・136・138、144～155） 135・136・138は口頭部片である。135はSB16の柱穴から出土している。144～155は平安時代に属すと考えている甕体部片であるが、一部古墳時代のものも含まれているかもしれない。外面は平行タタキないし格子タタキで、147、148はカキ目を加える。内面はハケないしナデで平滑にするものと、同心円タタキを残すものがある。

施釉陶器（140～143） 140～143は灰釉陶器で、140は三ヶ月高台をもつ椀で、見込みに直接の重ね焼痕が残る。141は段皿で、内面上段のみに縁っぽい灰釉がかけられている。142は長頸瓶の口縁部片。^{（註1）}143は灰釉が認められないが、胎土・色調などから灰釉陶器と考えられる。以上の陶器は黒塗90号窯式期と考えている。

C 土製品（図25 1～4・12・13・15～17）

ふいご羽口（1～4） 図化したものを含めて8個出土している。1～3は先端部の破片でいずれも口は熔変している。推定直径は5～6cmで、羽口としては小さい部類である。4は古墳時代の高环脚の転用品である。

その他（12・13・15～17） 12・13はちょうど壁土が焼き固まった感じの物である。葦や藁のような植物が砂と一緒に練り込まれた粘土が火をうけてレンガ状となった品物で、赤褐色を呈する。類例が市内の屋株（やかぶ）遺跡で平安時代の住居跡のカマド周辺から出土している。^(註2)

15はかまどの跡ないし大形の高台と推定される土製品で、表面はナデないしハケで平滑。焼成は良好。16・17は土鍤。現存の重さは16が48g、17が80g。平安時代に属すのかはわからない。

D 石製品（図25 14）

14は鍛冶に使用されたと考えられる石製品で、表面は火をうけて赤化している。上・下面是もともとの石の表面で打痕跡と磨痕跡が認められる。側面は破面である。14の他にそれらしき石が数点鍛冶遺構SK8周辺から出土している。

E 鉄製品・鉄滓（図25 5～11・18～21）

鉄製品（18～21） 18・19は鉈である。扁平な形態のもので、口は両端がハート形に開く。鍔はつぶされて突出する。上端は何かにとり付けた痕跡が残る。18には中に扁平な小石が入っている。両者ともにE3区の同じ柱穴から出土している。平安時代かどうかはわからない。

20は刃物の刃部である。短刀か。

21は角鉄で、頭は扁平なタイプのものである。

鉄滓（5～11） 鉄滓は鍛冶遺構SK2・SK8を中心に約1kg出土している。

5～9はいわゆる椀形滓で、出土品の主体である。茶褐色を呈し、多孔質である。表面に木の繊維らしきものが付いているものがある。5が217g、6が206g、7が112g、8が76gで、9は22gと軽い。

10・11は塊状のものだが、他の特長は5～9に等しい。10が28g。

注1 横崎彰一・斎藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査報告（III）』 愛知県教育委員会 1983

注2 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告』I 坂井市教育委員会 1989

5 中世・近世

中・近世の遺物は、土坑・井戸を中心に出土しており、量的には古墳時代出土品に次いで多い。図化したのは出土品の一部である。

A 陶磁器

（1）珠洲系陶器（図24 156～158）

図示した3点は甕の小片だが、他に摺鉢の破片が一点ある。156はSE5出土で、表面はややすくすむ。157は甕頸部片である。黒褐色の微細な粒のふき出しがある。肩部には自然釉がかかっている。G7区出土。158はSB10P2出土品で、前二者とは色調や、タタキの感じがやや異なっている。

これらの珠洲系陶器の年代については小片のみではっきりしないが、157の頸部の形状などから14世紀以降のものと考えておく。

（2）近世陶磁器（図26 1～26・図27 27～31）

1～3はSE3出土品である。1はくすんだ白緑色釉のかかった志野製品で、江戸前期のものである。

^(註2)

2はやや黄色味がかった灰色釉が全面に施釉されている。ごけ底で、外面に重ね焼きのトチン痕が残る。釉には細かい貫入がある。美濃で江戸前期。

3・4はねずみ志野で、4はSE4出土。いずれも貫入の著しい灰色釉が全面に施釉されている。底部高台内周にφ1.5cmのトチン痕がある。3が江戸時代、4は桃山～江戸初期に比定される。

5～8は美濃ないし美濃系の灰釉小皿と碗で、5がG8、6がSE3、7・8がSE5出土。いずれも灰綠色釉が内面全面と外面口縁部のみに漬けがけで施されており、見込みにトチン痕がある。5は美濃で江戸前期。6は美濃系、7は美濃で江戸前期頃。8は美濃の碗で江戸中期頃。

9・10は鉄釉の天目茶碗で、9はSE4、10はSE5出土。9は口縁部の屈曲が著しい。9が江戸期。10は江戸中期から幕末。

11・12は美濃・瀬戸系の鉄釉皿である。釉は茶色味が強い。11がSK3、12がC6区出土。

13は黄釉の施された美濃・瀬戸系の丸碗で江戸中期以降。釉には細かい貫入がある。

14は細かい貫入が著しい黄緑色透明な釉がかけられた碗でSK3出土。高台の形態は磁器に似ている。

15・16は土師質に近い焼きの小皿で、底はロクロ糸切り痕が残る。いずれも緑色の釉が口縁部内・外面に漬けがけされている。また15は口縁部に灯明皿として使用した油かすが付着している。16はSK3出土で、灯明皿である。

17は紫色を帯びた鉄釉がかかった小皿で、SE6出土。外底にロクロ糸切り痕が残る。素地は茶色で土師質に近い。

18はSE3出土で、鉢と考える。素地は茶色で緑灰色の釉がかかる。

19～26は磁器である。19はSE6出土。20～23はSK3出土。19・20は青味がかった白磁染付碗で、細かい貫入がある。素地は灰色で陶器のようである。21～23は伊万里の白磁染付碗である。24は白磁のとっくりで神棚に供えるものであり今でも家庭の神棚に見られる。25・26は白磁の香炉で、25は赤絵付である。26は幕末に比定される。

27～32は摺鉢である。25・32がSK3出土。29～31がSE6出土。御し目が密で細かいもの(27・28・32)と、粗くやや太いもの(29・30)がある。口縁端部は丸く肥厚するもの(27)、外方に折り返すもの(31)、内に折り返して屈曲するもの(30)がある。30は口縁部に茶褐色の鉄釉がかかる。いずれも素地は赤褐色。27～29は備前焼で、28は幕末～明治に比定される。

注1 『株洲の名陶』 珠洲市立株洲焼資料館 1989

注2 近世陶磁器については東京五島美術館学芸課長竹内順一氏、丸子町教育委員会学芸員竹内一徳氏にご教示を得た。誤りがあれば筆者の責任である。

B 石製品(図30 1～12)

1は硯で、長方形の硯の一角である。裏面に文字が線刻してある。粘板岩製。C6区出土。

2～4は砥石で、2・3は扁平で4は長方体である。2・3が粘板岩系、4は凝灰岩系か。

5は軽石である。中央に抉りがあり浮子等に使用されたのだろうか。

6は角に脚をもつ箱状品で、脚を含む底面には黒色の付着物がある。安山岩製。SE6出土。

7～10は五輪塔の空風輪で、すべてSE3出土。7・9は頂部が突出し、8・10は頂部がへこむ。9は風輪に接続の穴をもつ。いずれも頂部の突起が大きくなる以前の特徴をもち、江戸期に降らないと考えられる。安山岩製。

11は石臼でSE3出土。上臼で、目は中心から放射状に刻まれている。安山岩製。

12は用途不明の石製品で、中央がレンズ状にくぼんでいる。安山岩製。

C 木製品・漆製品（図28 1～4）

木製品は図示したものは3点だが、他にSE3・SE4からコンテナ1箱分の板状品・棒状品、自然木などが出土している。漆製品は図示したもののみである。

1は箱物の側板と考えられるもので、木釘および木釘痕が7か所残っている。板目材。

2は柾目材の板状品である。3は長さ57cmの板材で一部に刃物によるキズがある。

4は漆碗で全面に黒漆が塗られている。口径12.6cm、器高5.5cm。

1・2・4がSE3出土。3がSE4出土。

6 その他の時代（図21 88～90 図29）

弥生時代の土器が少量と磨製石鎌がある。88は弥生時代後期の壺で不連続な櫛描文が施される。

89は赤彩の高环環部ないし鉢の破片である。90は小形の壺である。

図29は磨製石鎌で、全面ていねいに磨かれている。F6区南西隅ピット出土。緑泥片岩製。重さ2.0 g。

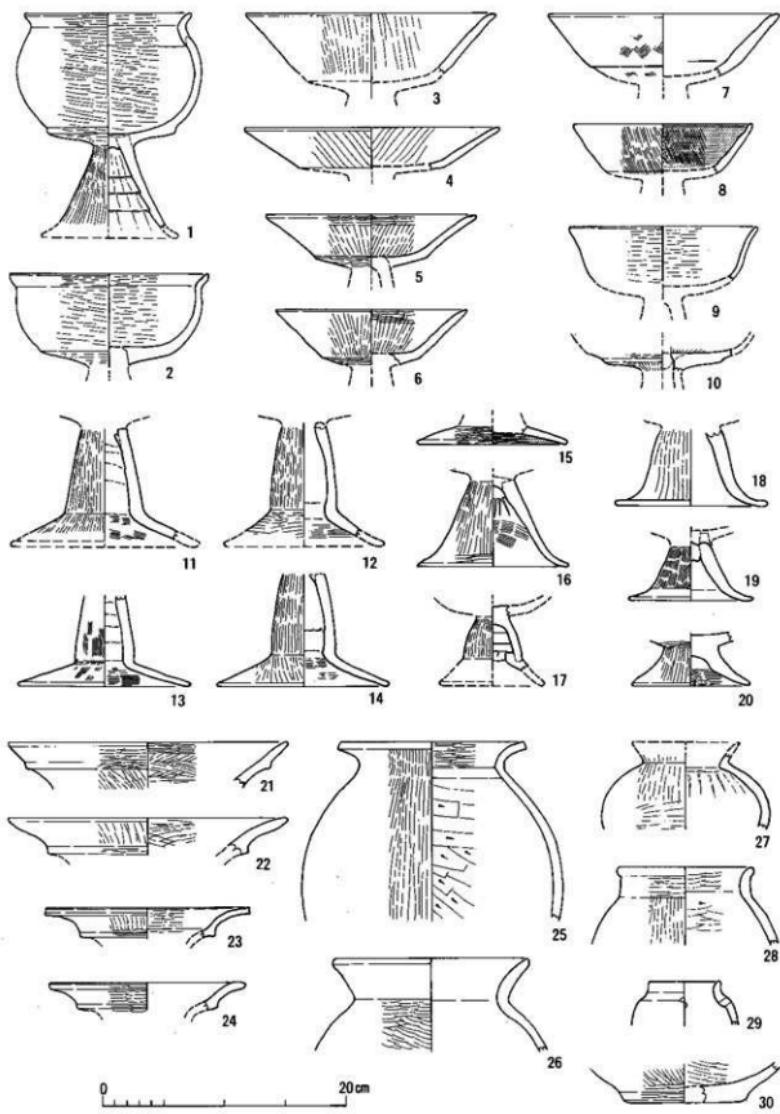


図20 土器・陶器実測図1 古墳時代 1 : 4

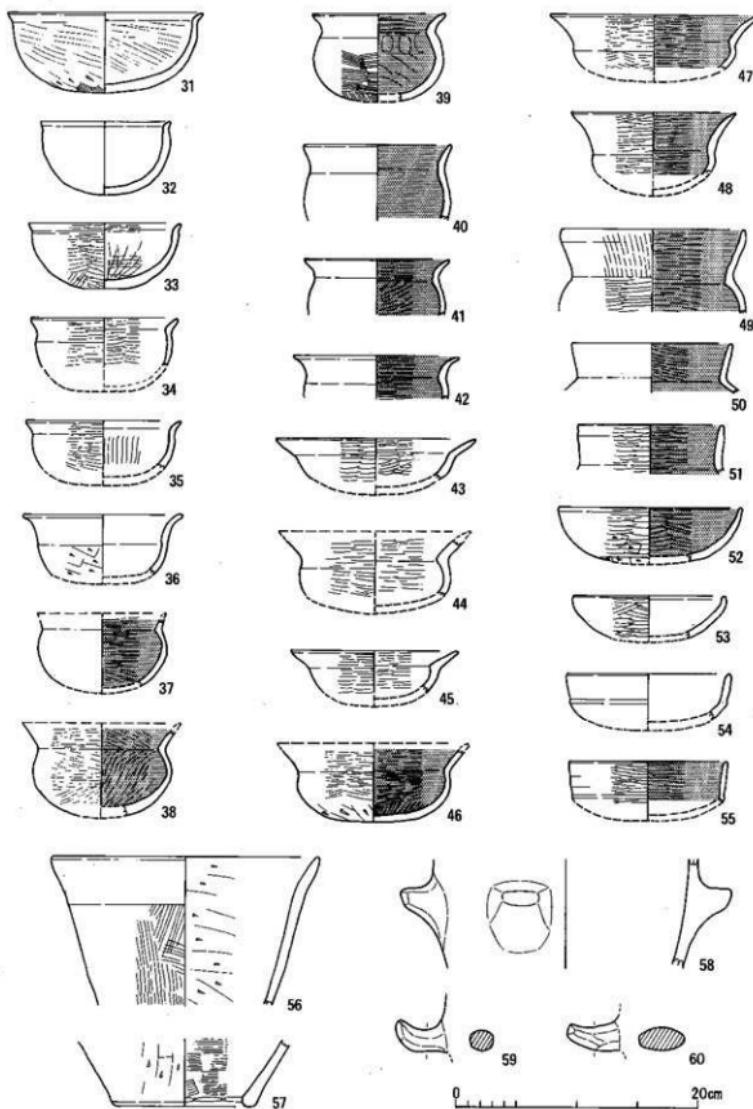


図21 土器・陶器実測図2 古墳時代 1:4

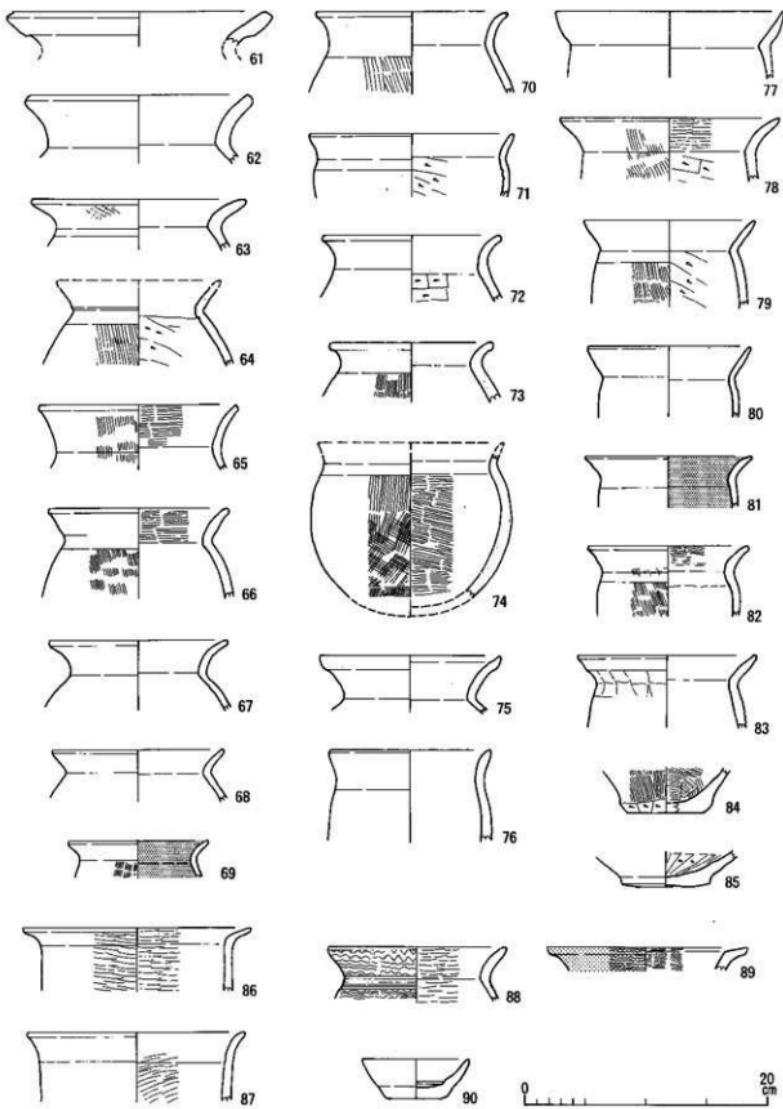


図22 土器・陶器実測図3 古墳時代・弥生時代 1:4

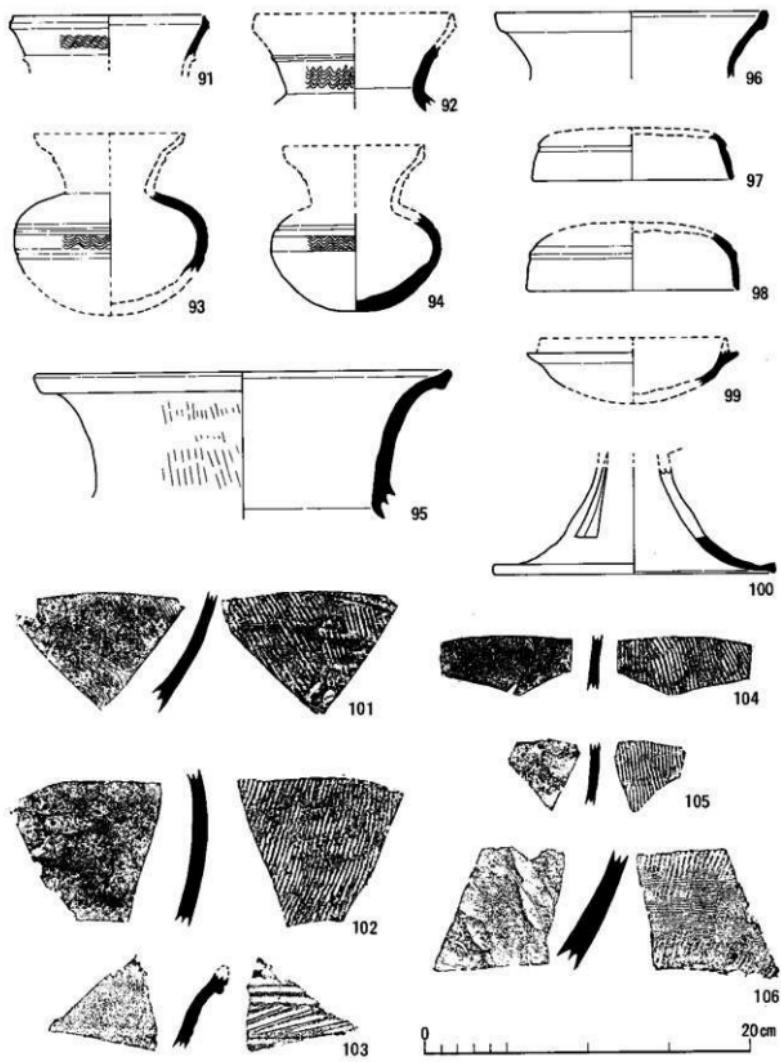


図23 土器・陶器実測図4 古墳時代 1:3

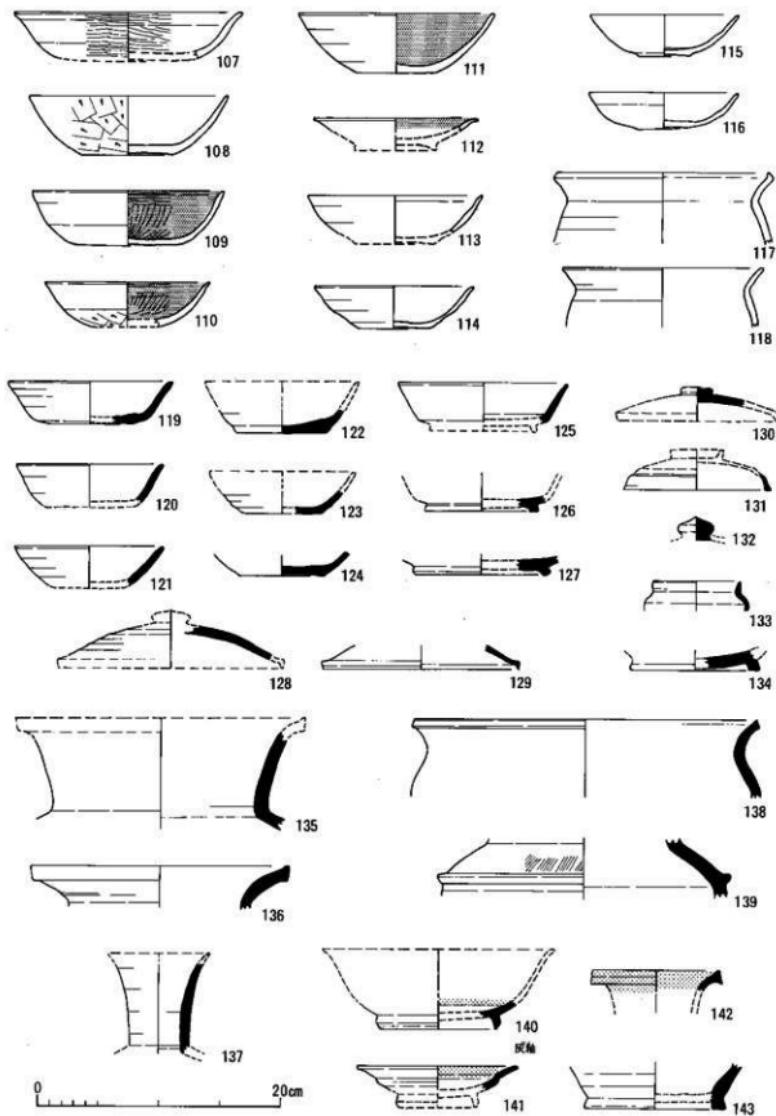


図24 土器・陶器実測図 5 平安時代 1 : 4

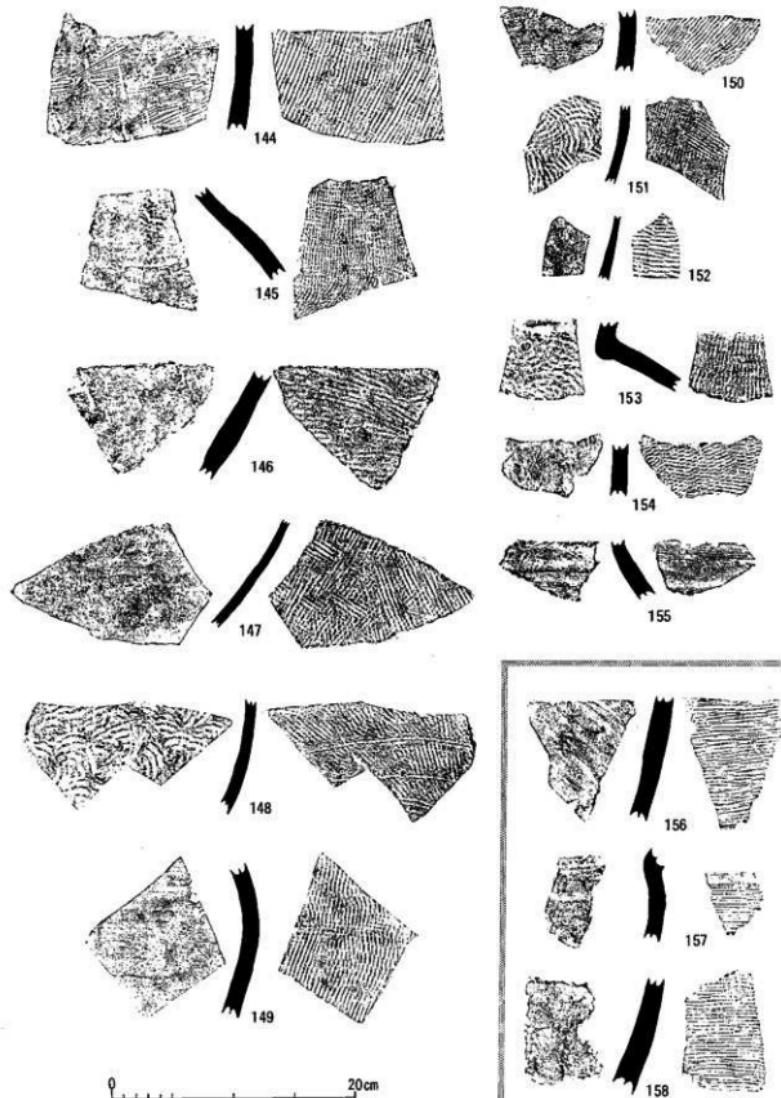


図25 土器・陶器実測図 6 平安時代・中世 1 : 4

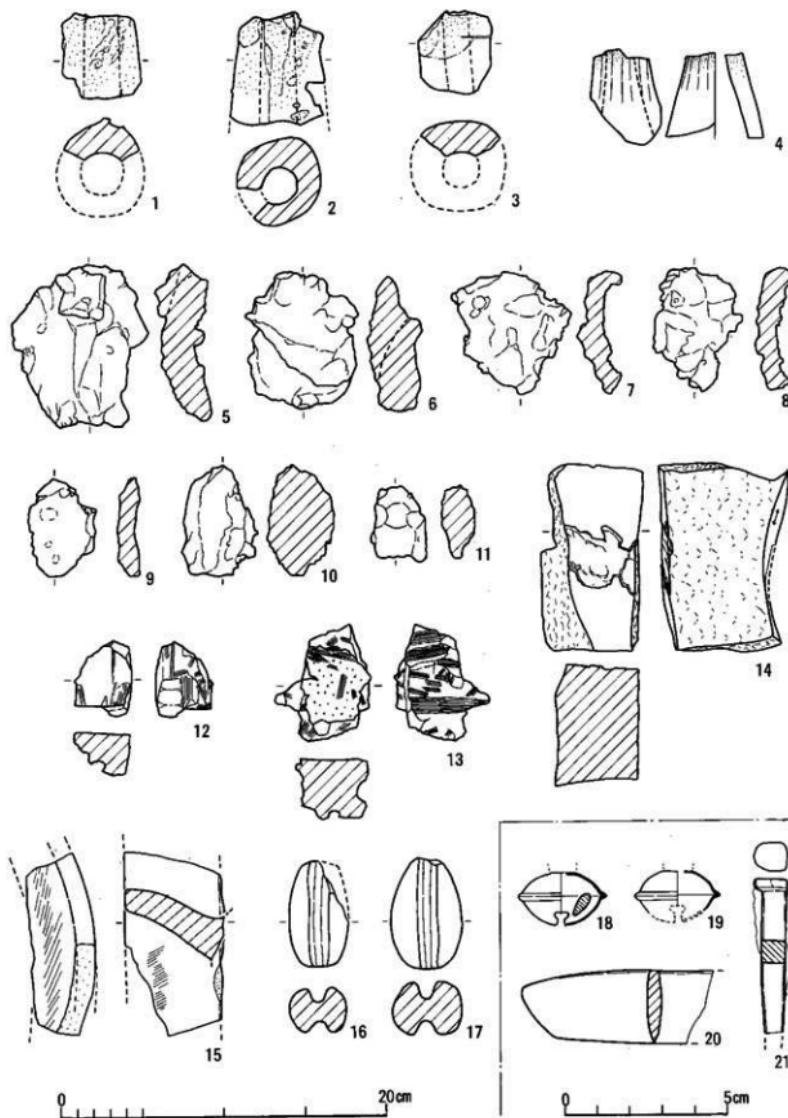


図26 土製品・鉄滓・石製品 (1 : 3) 鉄器 (1 : 1.5)

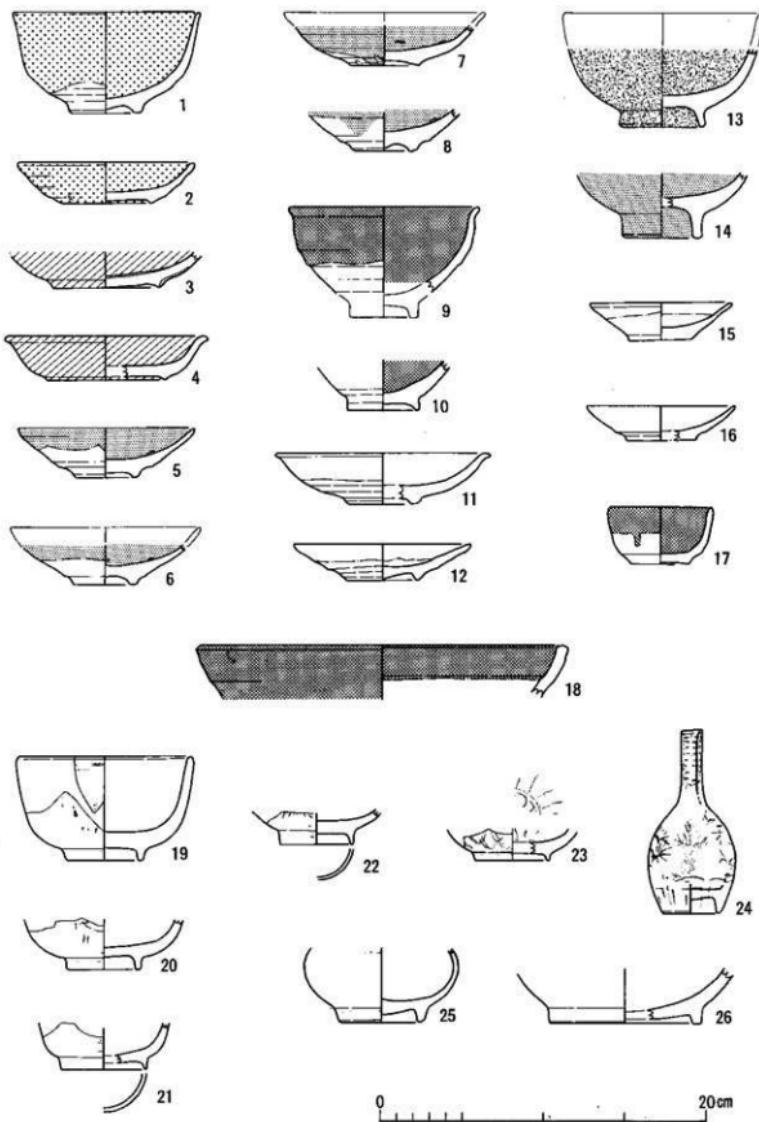


図27 陶磁器実測図 1 1 : 3

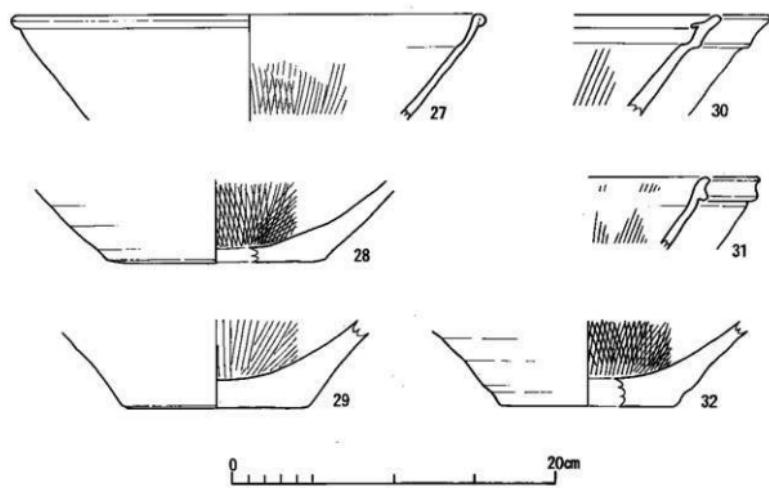


図28 陶磁器実測図2 1 : 3

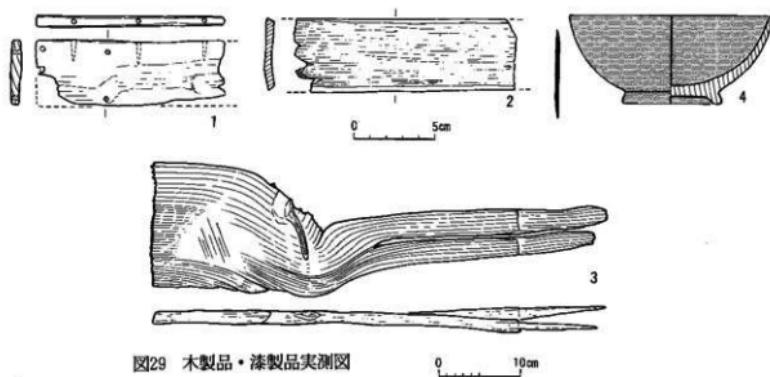


図29 木製品・漆製品実測図

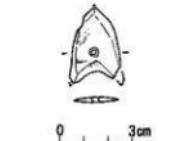


図30 磨製石鎌 1 : 2

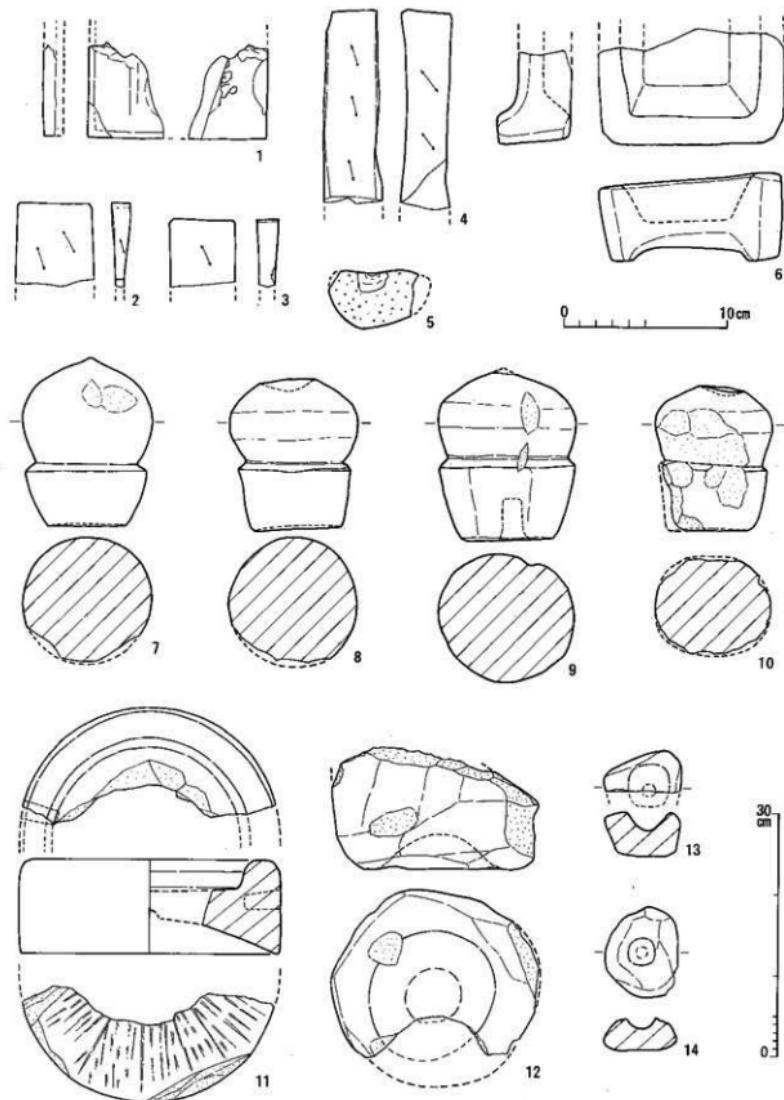


図31 石製品実測図 1 : 3

第5章 まとめ

1 有尾遺跡の変遷(図32)

今回調査地の主な遺構は図31のとおりである。これらは出土遺物や切り合い関係などからI～VIの6期に分けられる。

I期 旧石器時代。石器の出土は少なく、また確実な文化層を確認していないが、石器の分布を見ればC・D5区に集中する傾向がある。より綿密な調査を行えば、旧石器時代の生活跡が確認できるであろう。

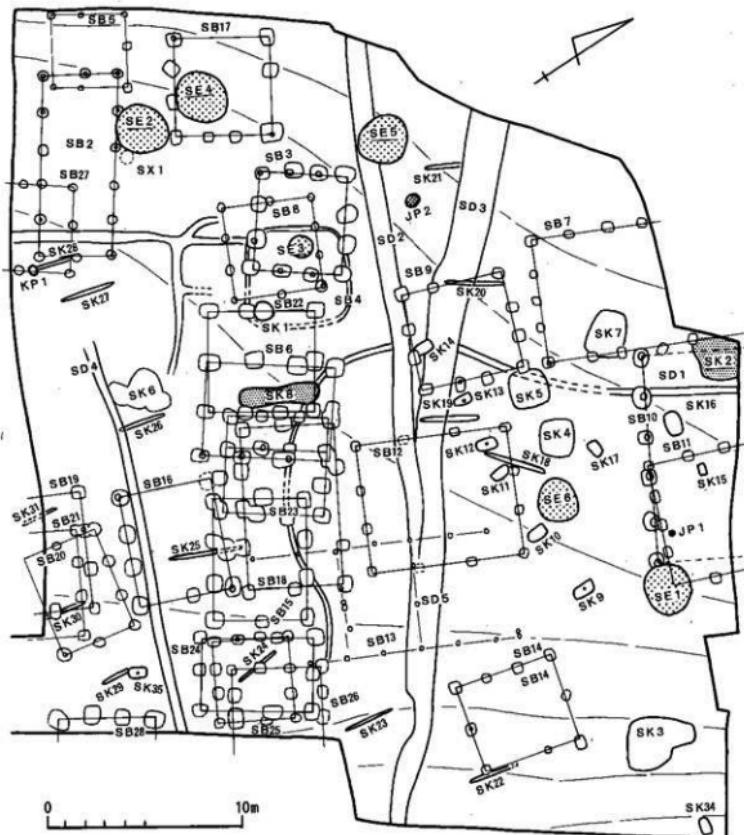


図32 主要遺構図 1 : 20

II期 繩文時代。落し穴と推定される方形土坑11基および溝状土坑16基、ピット2基がこの期にあたる。ピットは中期前葉の土器が出土しており、同様の年代が与えられる。

落し穴と推定される土坑は扇形に規則正しく並んでいる。ある一時期に掘られたものと考えてよいだろう。その年代については、当地の西約50mの所で検出されている縄文時代前期前半有尾式期に求められよう。有尾式期には当地は集落に近接する狩り場であったと考えられる。

III期 古墳時代 溝SD1・2・3・5・7、竪穴住居跡SB4、土器だまりSX1、土器埋納ピットKP1が当期にあてられる。ただしこのうちで確実に当期に比定できるのはSB4、SX1、KP1である。SD1は平安時代の鍛冶遺構SK2に切られることから当期に置いた。台地等高線に直交する大溝SD2・3・5は中世以降の遺物も混入しているが、新しい柱穴等との重複を確認せずに溝を掘り込んだことや、一部遺物を残しながら慎重に掘り下げた所では古墳時代の遺物のみであったことから当期においた。SD7についても古墳時代の遺物が大半であったことから当期においた。

溝SD2・3・5は集落を画する溝とともに、排水溝の機能が考えられる。

竪穴住居跡は1棟のみの検出であるが、SB4の検出された深さは5cm以内であり、多量の当期の土器の出土を考えれば、他にも竪穴住居ないし掘立柱建物が存在した可能性は十分に考えられる。なお、竪穴住居SB4は周溝と焼土は検出されているが主柱穴は検出されていない。

土器だまりSX1については高环のみであることから祭祀遺構と考えられよう。

当期の年代については高環の形態や、古式須恵器から5世紀後半を中心とした年代が与えられる。過去の調査においても鬼高期の竪穴住居跡1棟と和泉期・鬼高期の土器が出土しており、当地が古墳時代の集落であったことがうかがえる。そして古式須恵器の存在は当遺跡が坂山地方でも早くから須恵器を入手し得た有力な集落であることを示唆している。

また、当地に西接する丘頂には前方後円墳1基、円墳2基からなる有尾古墳群があるがそれらは丘頂よりやや東へつまり当遺跡側へやや下った所に立地する。当遺跡との密接な関係が想起される。

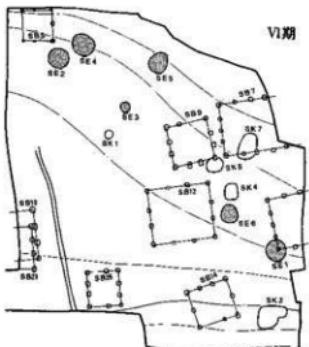
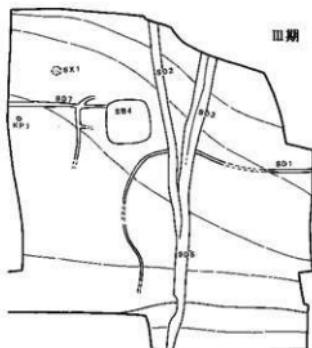
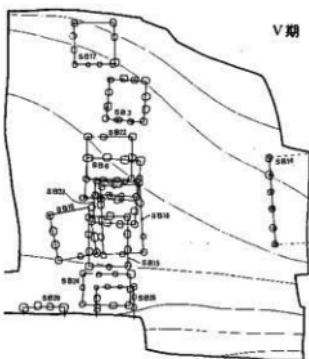
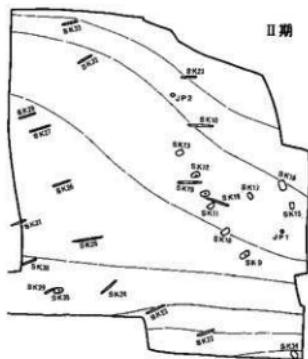
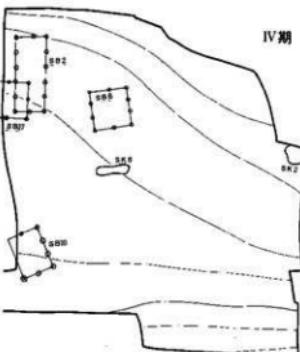
IV期 平安時代。掘立柱建物SB2・8・20・27、鍛冶土坑SK2・8が当期に比定される。SB2は柱穴から平安時代の遺物が出土することから当期に、SB8・20・27は柱穴の形状・規模・柱間寸法などがSB2に類似するので当期に置いた。

年代的には、黒笹90号窯跡の初現を9世紀末から10世紀初頭とすれば、10世紀を中心とした年代が考えられる。そして、出土土器の中に奈良時代的な様相のものが少なからずあることを思えば、当集落の成立は平安時代でも初期にさかのばる可能性がある。

V期 中世。柱掘形の一辺が約1mをはかる大形掘立柱建物群がこの期にあてられる。大形掘立柱建物を群として同一時期にしたのはSB17とSB3、SB22とSB6とSB23、SB18とSB15とSB16、SB24とSB26がほぼ同規模で同じような位置に建て替えられているように考えられることや、柱穴の規模・形状・柱間寸法・主軸方位などが類似していることによっている。

建物群の年代については、今のところSB10の柱穴から14世紀代の珠洲焼が出土していることから中世と考えているが、中世の遺物は珠洲焼をのぞけばごく少ない。出土遺物の多い近世以降に降る可能性もなお残っている。建物群の性格については後述する。

VI期 近世以降。掘立柱建物SB5・7・11・12・14・19・21・26、SE2~6、SK1・3~5・7溝SD4が当期に比定される。掘立柱建物についてはSB9の柱穴から近世磁器が出土しており、SB9と柱穴の形状・規模・柱間寸法・主軸方位などが類似したものを当期に比定した。ただし、SB19・21・26については前の期の建物群との共通性もあり、流動的である。井戸は出土遺物のないものもあるが、構造が近世遺物を出土したものと共通するので当期に置いた。



有尾遺跡変遷図

年代的には出土遺物から江戸時代初期から幕末までと考えられるが、遺物量からすれば江戸の後半期から幕末にかけてが中心と考えられる。そして、井戸の出土遺物を見ればSE3・4が古く、SE6が新しいので、西から東へ移行していったものと推測される。

性格としては、神棚に供えるとっくりや、鉄鉢の存在、西隣に飯笠山神社があることから、神社に関係するものとも考えられるが、とっくりや鉄鉢の他にはとりたてて神社に関係のある遺物はなく、むしろ一般的な集落の様相を呈している。ともあれ近世以降の有尾については文献資料や絵図面からの検討を含めて今後の課題である。

2 大形掘立柱建物群の性格

前項で既に比定した大形掘立柱建物群は当方では初めての検出であり、今回の発掘でも遺構の中心的位置を占めている。そこでここでは建物群の性格について市内遺跡の類例を参考に考えてみることとする。

建物群の特長 当建物群の特長は、柱掘形が一辺1.0m以上のものが多く、大きいこと、(ことに、SB17、SB3、SB22、SB6など2間×3間ないし3間×3間)と建物の規模は小さいながらも柱掘形が大きい)確認された柱痕跡もφ30~40cmと大きいこと、柱間寸法が1.8m、2.1m、2.4m、など30cm(一尺)で割り切れる建物が大半を占めること、E・Fラインに重複して並んでおり、主軸方位が概ねそろっていること、などの諸点があげられる。

さらに建物群を注意してみると、西から3間×3間ではほぼ同規模のSB17とSB3が近接しており、次に3間×2間ないし3間×3間の南北棟でしかもほぼ同規模のSB22・SB6・SB23が重複してあり、次いで当建物群では珍しい東西棟のSB16・SB15・SB18が重複してあり、東端へゆくとSB24とSB25が重複してある。これらは近接する所ではほぼ同規模な建物が建て替えられているかのようであり、一定の規則性を感じさせる。SB10はE・Fラインの建物群からやや離れており、柱穴も一列しか検出されていないが、もし建物として復元できるとすれば、最大の建物であり主屋と考えられるものである。

これらの特長は、当建物群が一般的な集落ではなく官衙的側面をもつことを示唆している。

周辺遺跡例との比較 市内で中世の掘立柱建物の類例は多くないが、平安時代例も含めて比較してみる(図33)。
(注3)

北原遺跡は平安時代前半(9世紀後半~10世紀)の鍛冶遺構を中心とした遺跡で、一集落内における鍛冶屋的な類ではなく、専門的集団による工房址と考えられている。掘立柱建物は9棟検出されており、図示した第3号・第4号はその中でも大形の部類である。当遺跡のSB6やSB22等3間×2間の建物と規模はよく似ているが、柱掘形は当遺跡例がやや大きい。また北原では2棟のみが近接してあるのに対しても当遺跡では重複して10棟以上がある点で異なっている。

長者清水遺跡は中世(14~15世紀)の幅約3mの堀をめぐらせた館跡で、3号掘立柱建築址はその主殿と考えられるものである。7間×1間の東西棟で、桁行17.5m、梁行6.5mをはかる。梁行の柱間が6.5mと長い感がある。当遺跡のSB10も梁行5m分で柱穴が確認されておらず、梁行は5m以上に復元されよく似ている。第2号掘立柱建築址は南北棟で館内北東隅に位置する。柱穴は円形プランで掘形も小さい。

釜淵遺跡は中世(13~14世紀)の遺跡で、永仁4年(1296)銘の呪符木簡や、鳥形木製品が出土している。図示したSB1・SB2は遺跡の平均的な建物である。柱掘形は円形プランでφ50cm前後と小さい。他の建物で柱根が検出されているが、平均すると直径ないし一辺約15~17cmであり、半割材などが混じっている。発掘面積が小さくまた、出土遺物に輸入磁器等が豊富であること等から発掘地点が中心部分でないとも考えられるが、建物は小規模である。

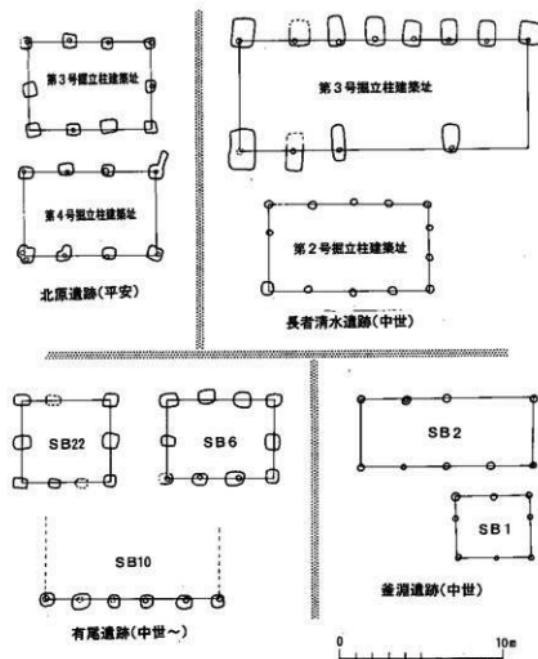


図34 周辺遺跡の掘立柱建物 1:300

注2～注4文献より一部を改変して記載

以上の諸例と比較すれば、当遺跡例は柱掘形の規模でも館跡の主殿である長者清水遺跡第3号掘立柱建築址に次いで大きく、釜淵遺跡例や、長者清水第2号掘立柱建築址に比べると格段と大きいことがわかる。

そして、記述が重複するが、同規模の建物が規則性をもって建て替えられる様相や、建物が並列する様相は、当遺跡特有の様相であり、領主の館というよりは、役所ないし計画的に配置された倉庫群のような性格が考えられよう。

ともあれ、当建物群は柱穴の切り合い関係も十分に検討しないまま調査を終了した。年代についても確定し得るほどの根拠をもたない。残された課題は大きい。

注1 笹沢浩「平安時代の土器」『長野県史』考古資料編全1巻4 1988

注2 「北原遺跡調査報告書」飯山市教育委員会 1980

注3 「長者清水・水の沢遺跡」飯山市教育委員会 1985

注4 「釜淵・北顔戸遺跡」飯山市教育委員会 1988

第6章 総 括

飯山市有尾といえば、中部地方縄文時代前期の有尾式土器の標式遺跡として広く知られている所である。今回の調査地域は、1952（昭和27）年神田五六氏が調査した地点に近接しており、当然有尾式土器とそれに伴う遺構が検出されるものと予想したのであった。だが予想に反して今回の調査では、有尾式土器やそれに伴う遺構、遺物は全く検出されなかった。しかしながら、新しい成果をいくつか得ることができた。以下簡単に今回の成果を述べ、総括としよう。

(1) 削器、搔器、刃器等をはじめとする旧石器時代の遺物が25点出土したことである。飯山平の千曲川段丘上には、旧石器時代の遺跡が数多く存在することはよく知られているところであるが、今回また新しい遺跡を追加できた。有尾段丘上に旧石器時代の遺跡が存在するだろうとの予測は、分布調査の折に本遺跡の北方林子畠遺跡で黒縞石製の搔器と推定でき得るものを探集したことや、飯山城址の三の丸北端で、旧石器時代の石刃と思われるものが検出されていたからである。今後の調査次第で、良好な旧石器時代の遺跡が存在する可能性を示唆してくれたものといえよう。

(2) 1952年調査の折に縄文中期後半の土器が若干出土しており、有尾段丘上のどこかに縄文中期の遺跡が確実に存在するに違いない。今回出土した中期前葉の土器は、北陸方面との関連を示すものであり、該期の研究に新しい資料を加えることができた。中期初頭乃至前葉の遺跡として近くに須多峰遺跡がある。

(3) 古墳時代中期の土器が大量に出土した。常盤井が「遺構」の項で触れているように、攢乱を受けて破壊の度合が著しく、明確に古墳時代の遺構と断定するものは、きわめて少ない。しかしながら、土器が大量に出土していることや祭祀遺構と思われるものが存在することは、明らかに居住したことの証拠である。出土土師器は、和泉式、鬼高式に併行するものであろう。桐原健氏が調査した遺跡や有尾地籍から出土している該期の遺物を考える時、古墳時代中期から後期前半にかけて有尾段丘上に相当大きな集落が営まれていたと推定してよいであろう。有尾古墳と集落の関係を究明する上に今後とも調査を進めてゆく必要があろう。今回調査の成果は、その一つの道程といえる。

(4) 平安時代では、土師器、須恵器、灰釉陶器、フイゴの羽口等出土している。銀治遺構を伴った集落の存在を予知せしめている。

(5) 珠洲系陶器の出土は、飯山地方の中世遺跡に一般的に認められているところである。鎌倉時代末期から室町時代中期にかけての在地領主層の成長と無縁ではなさそうである。それとともに物資交流の活発化を示しているといえよう。政治的交渉と経済的流通過程が次第に一体化の様相を示したといってもよいであろう。また、五輪塔の出土も中世末期に有尾地籍に在地小領主層が存在したことを暗示している。

(6) 志野、美濃等の近世前期の陶磁器が出土していることは、戦国時代末にそれ等の貴重品を受け入れるだけの経済力を保有していた者が存在していたことを示しているといえないだろうか。ここに思いだすのは、上杉景勝の城代岩井備守信能である。彼は、上杉景勝の命をうけ飯山城の修築を行っている。そして、飯山城下町の整備にも大いに意を用いている。この折、城下町の整備、城郭普請等の人足を指図したのは、有尾長者清水大炊であったという。戦国時代末期飯山町形成の原動力となる人物が、有尾を基盤として成長していたことを物語っている。

(7) 江戸時代中期から幕末にいたってもこの地点は、人々の居住の地であった。井戸が掘られ、住居が営まれ美濃、瀬戸系の陶磁器や伊万里の白磁等が付器として使用された。飯山地方では、近世遺構の調査は今回が初めてである。今後、近世城下町の庶民生活や農民の生活にも文献史料だけでなく、発掘調査と

いう考古学的研究方法を併用しつゝ、進めてゆく必要性を今回の調査は教えてくれたといえよう。特に資料に乏しい近世前期の研究については。

末尾ながら、今回の調査について種々とご指導下さった県文化課、埋蔵文化財に対して深い理解を示された飯山市農業協同組合（現いいやまみゆき農協）当局、物心両面にわたってご援助いただいた有尾区長さんはじめ地区の皆さん、炎天下にもめげず調査に協力いただいた作業員の皆さんに心よりお礼申し上げる次第である。



雨天時の現地テントでの土器洗い

PLATE



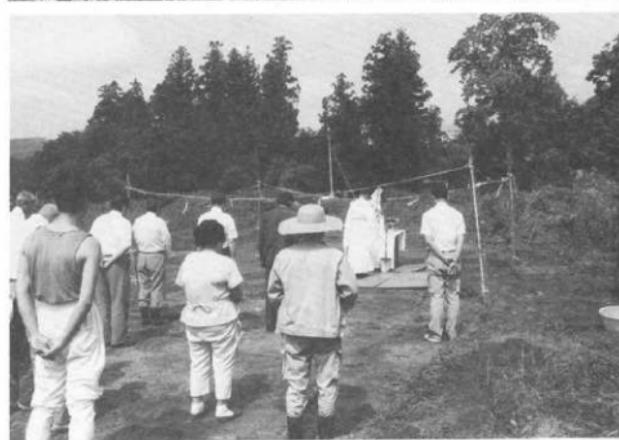
遺跡航空写真 約1:8000 1991年撮影



調査前の風景（南から）
後方が長峰丘陵
電柱の上あたりが有尾
古墳群



同上（西から）
台地端の崖をへて
千曲川堤防（R17）
を望む



調査開始式



調査地全景（東南から） 遺構上面輪郭



調査地全景（東南から） 宗指状跡



調査地東北部完掘状態（西から） 中央左端がS E 1



調査地南西部（北から） 中央が竪穴住居SB 4

縄文ピット JP 1
(東から)
土器出土状態



縄文ピット JP 2
(東から)
土器出土状態



落し穴 SK13 (東から)
完掘状態





堅穴住居 S B 4 (東から)
上面輪郭



土器だまり S X 1
近世井戸 S E 2 (西から)
井戸の右上が S X 1

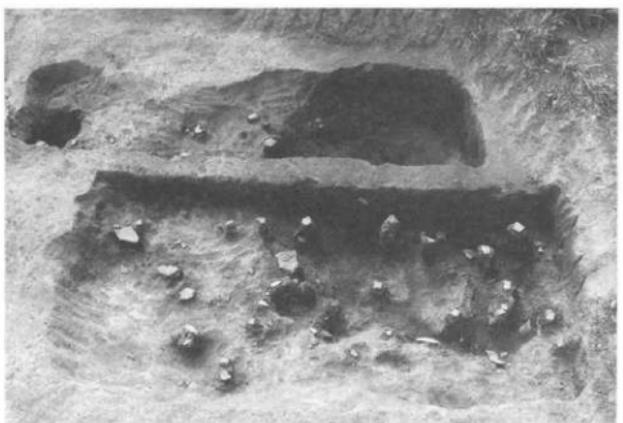


土器埋納ビット K P 1
(北から)
壺 2 個出土状態

掘立柱建物 S B 2
(東から)
手前の穴は搅乱坑



鍛冶関係土坑 S K 2
(東から)
遺物出土状態



大型掘立柱建物 S B 3
と竪穴住居 S B 4
(西から)
手前が S B 3 西側柱列

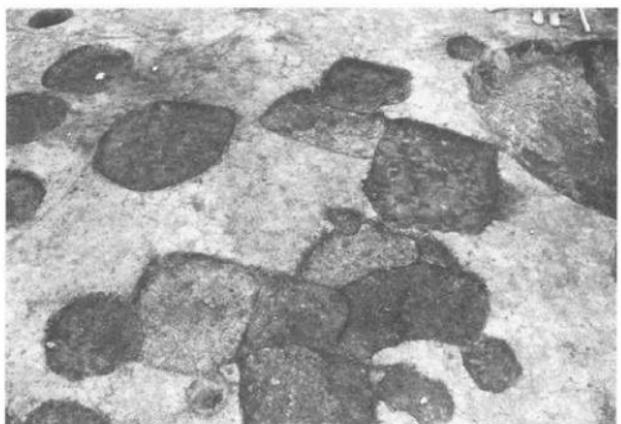




大形掘立柱建物群
SB 6を中心に
(南から)



大形掘立柱建物群
SB 15・18を中心に
(東から)

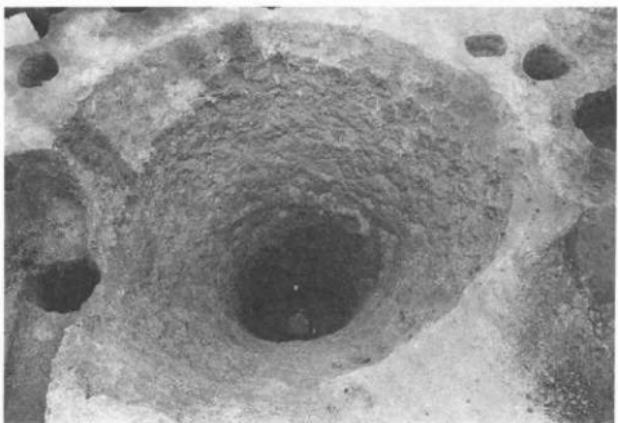


大形掘立柱建物群
柱穴切り合い関係
(北から)
中央やや上の黒っぽい
2個がSB 15の南側柱
列東端の2柱穴

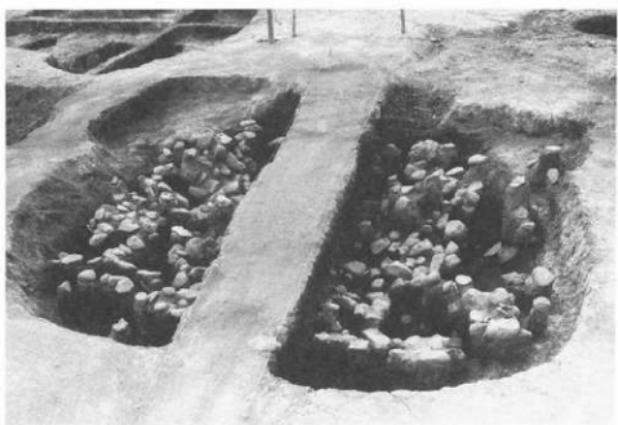
掘立柱建物 S B 7
(東から)

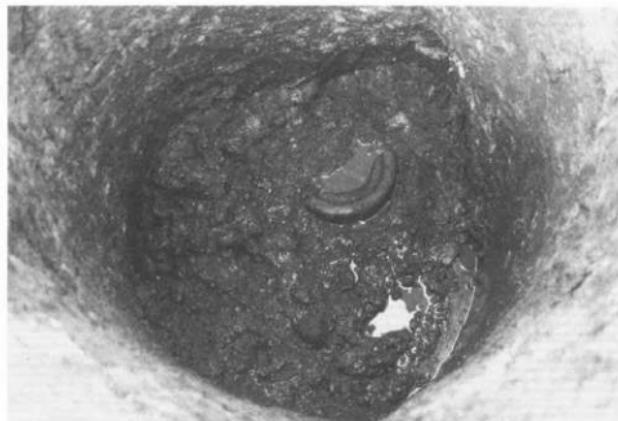


井戸 S E 1 (東から)



井戸 S E 5 (北から)





井戸 S E 3 石臼出土状態
(北から)



井戸 S E 4 (西から)
S E 4上の3柱穴と
右の半分切られた柱穴が
S B17



井戸 S E 4
板出土状態 (東から)

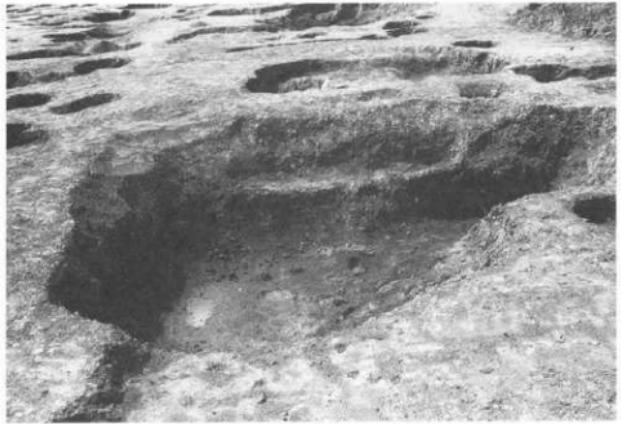
井戸 S E 2 (北から)
完掘状態

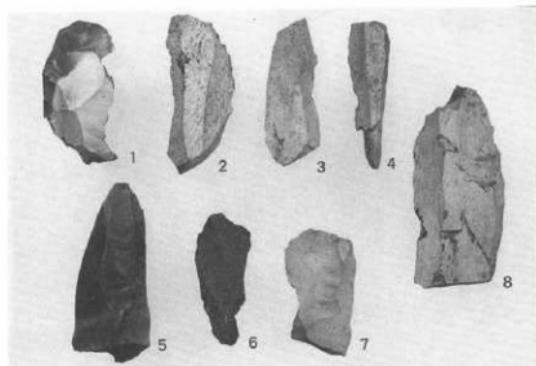


近世土坑 S K 1
(東から)
底面の石

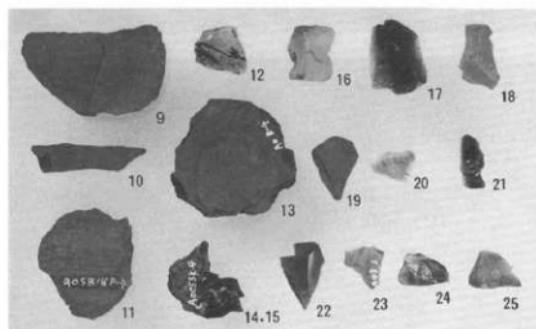


近世土坑 S K 3
(東から)
完掘状態

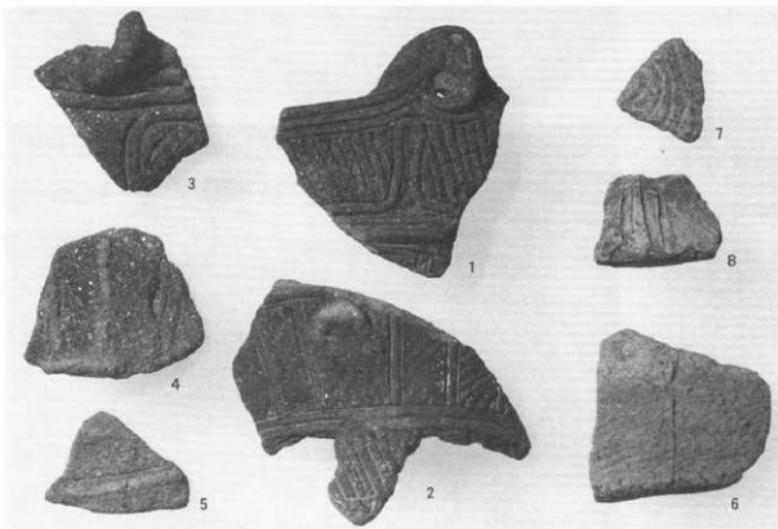




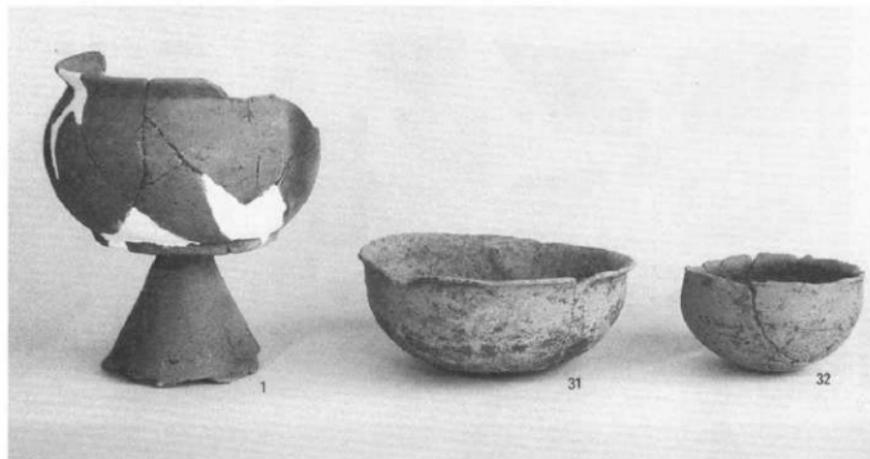
旧石器



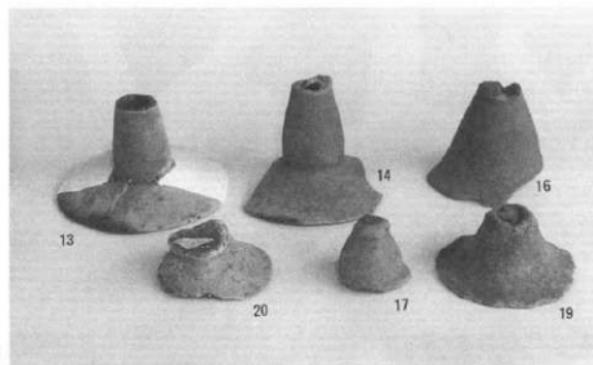
旧石器



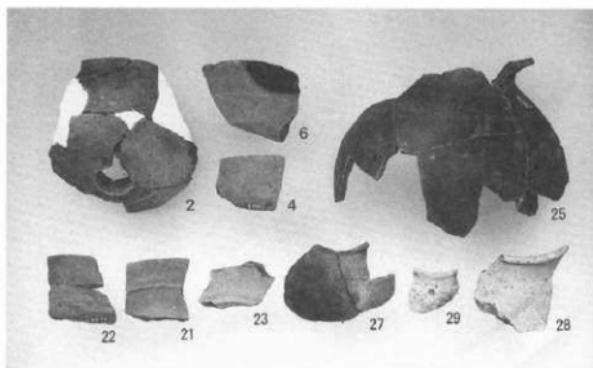
绳文土器



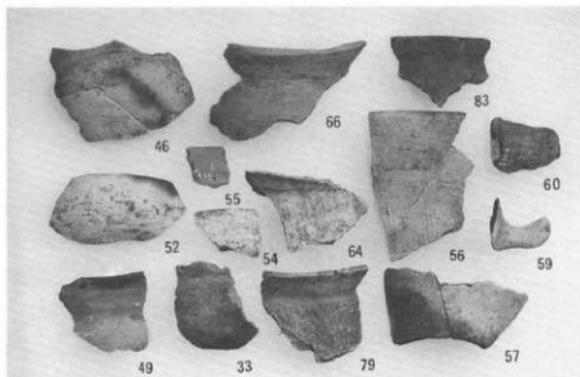
土師器 高坏・坏



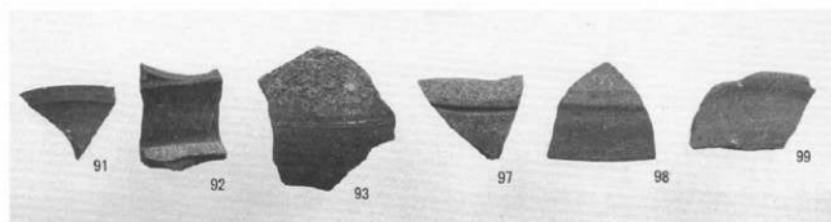
土師器 高坏脚部



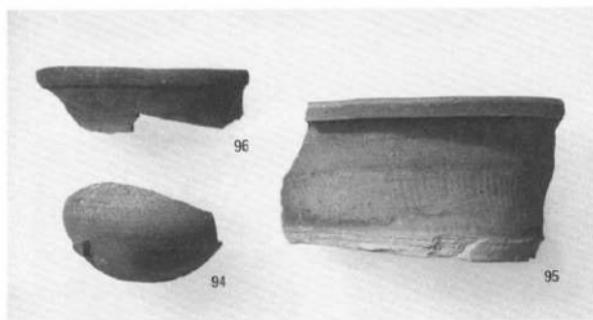
土師器 高坏・壺



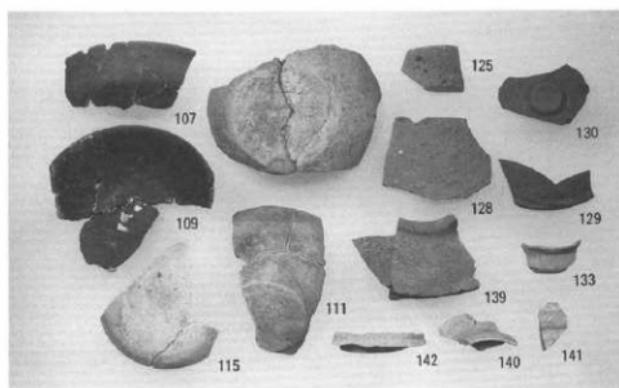
土師器 壺・壺・甌



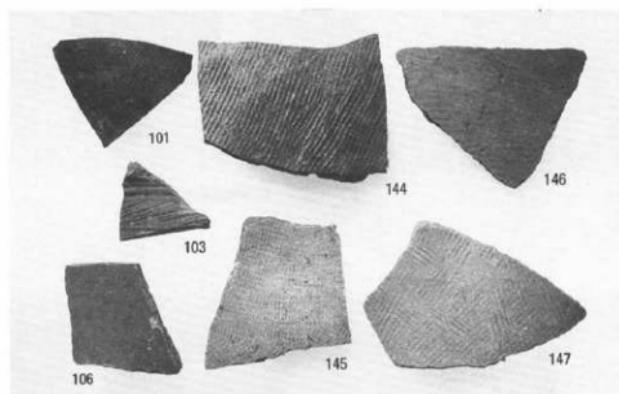
古式須恵器 壺・壺・甌



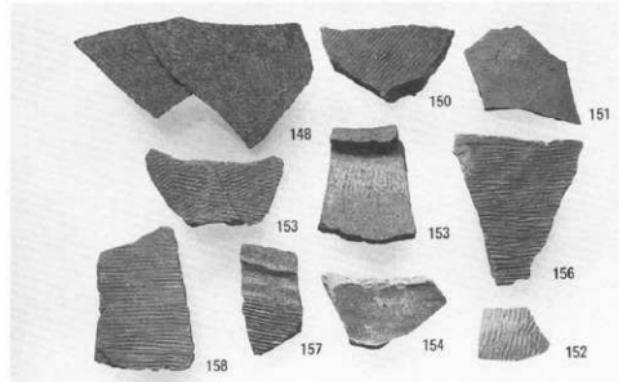
平安時代土師器
須恵器・灰釉陶器

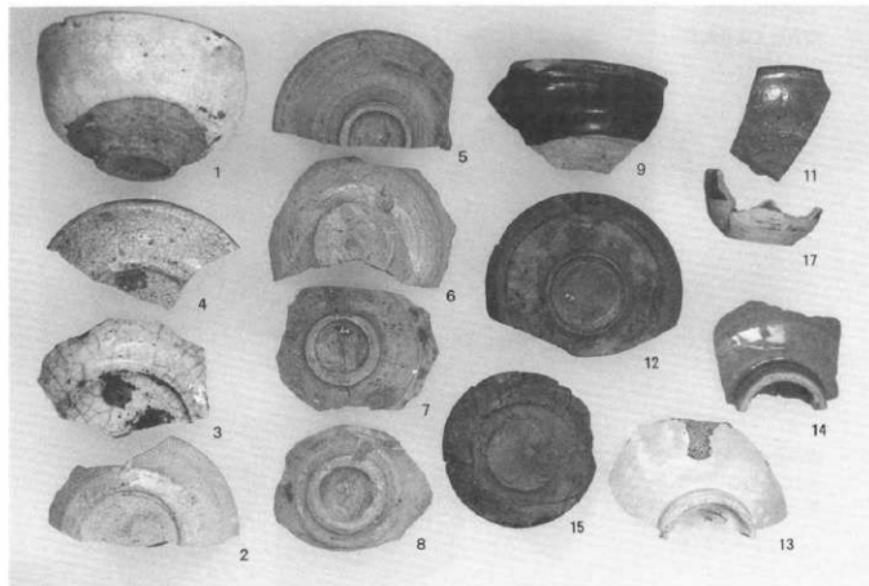


須恵器甕体部片
101は古墳時代
他は平安時代

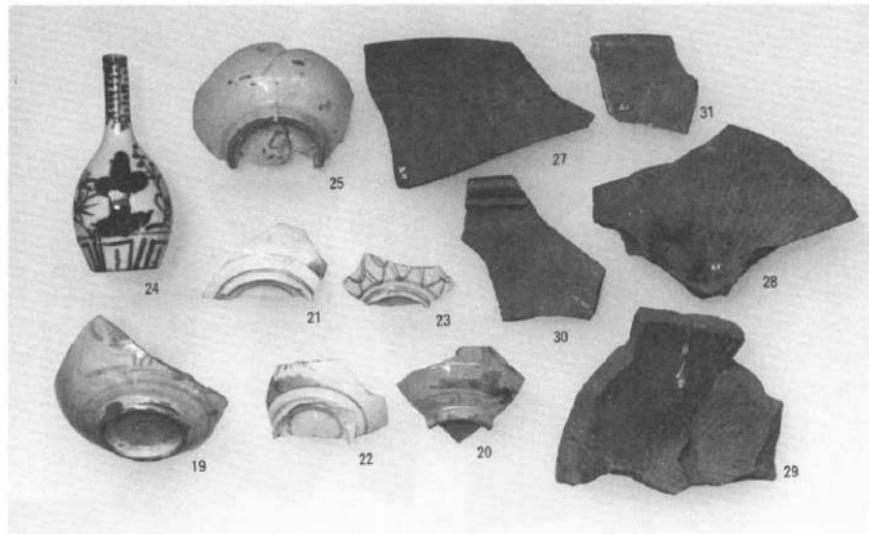


須恵器甕体部片
珠州系陶器
(156~158)



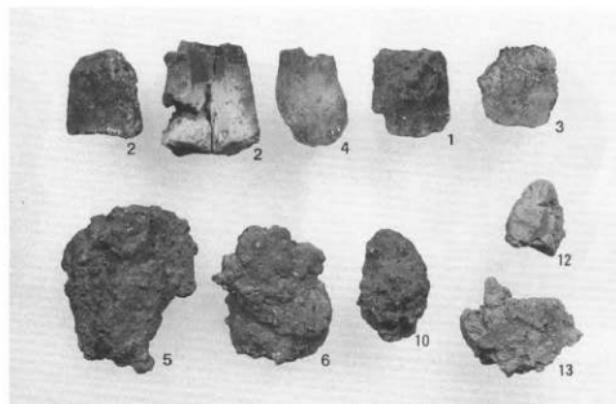


近世陶磁器

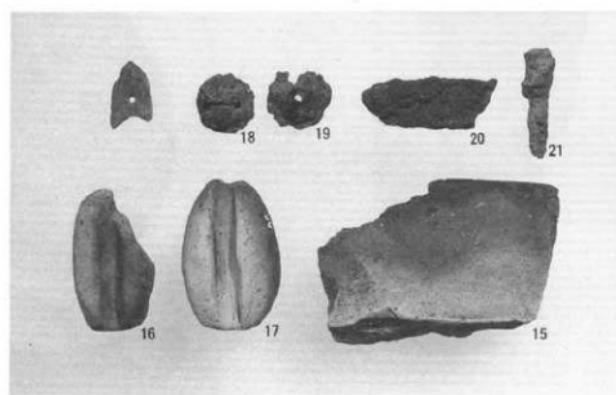


近世陶磁器

ふいご羽口 鉄 淵

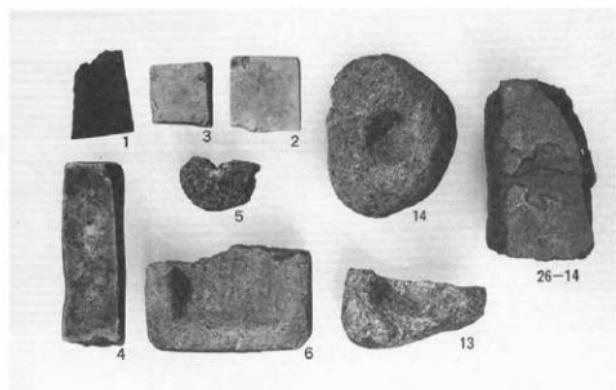


磨製石器
鉄製品
土 鍤
かまと



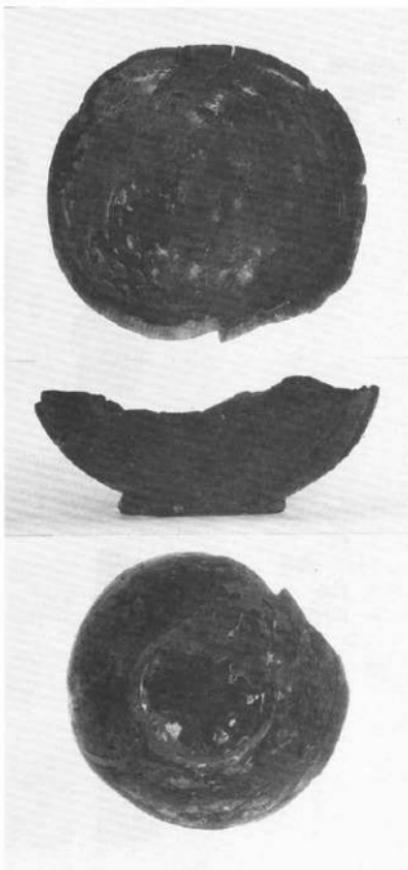
石製品

- 1 球
- 2 ~ 4 砥石
- 5 軽石
- 6 足付箱
- 13~14 繩文くぼみ石
- 26~14 台石





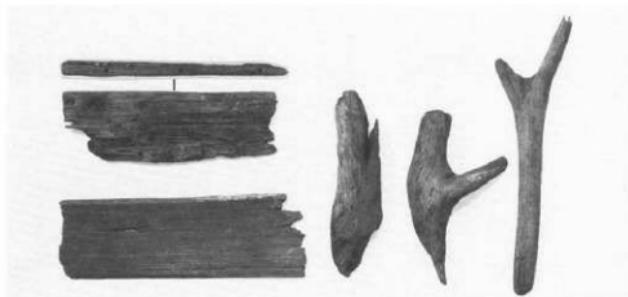
五輪塔



漆器碗

木製品

箱・板・自然木



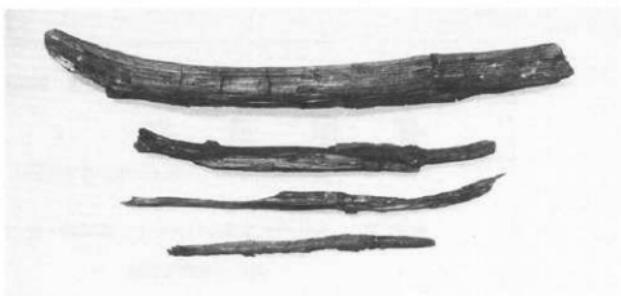
木製品

板状品



木製品

棒状品



飯山市埋蔵文化財調査報告 第30集

有 尾 遺 跡

1992(平成4)年2月29日発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1 TEL0269-62-3111

飯山市教育委員会

編集者 有尾遺跡発掘調査団

(団長 高橋 桂)

印刷所 飯山市大字常盤581-1

(有)足立印刷所

